

現代語訳

聖城怪談録

石川県図書館協会発行

大聖寺藩史談より

現代語訳

聖城怪談録

石川県図書館協会発行

大聖寺藩史談より

聖城怪談録 序

そもそも、世界は広く大きいのでさまざまなことがある。それなのに不思議なできごとが無いと、どうして言えるだろうか。晋しん《昔の中国》の阮瞻げんせんという人は、幽霊ゆうれいや鬼おになどいないと、えらそうなことを言っていたが、鬼におそわれるという不思議なことなのであっている。

古い書物によると、山や谷の悪い気が集まると魍魎もうりょうが現れて悪さをするという。また、水辺の悪い気が集まって魍魅ちみとなる。魍魎もうりょう《いろいろな化け物ばものや妖怪ようかいのこと》は形があるものや無いものの、さわれるが目に見えないもの、目に見えるがさわれないものがある。

天狗てんぐとよばれる妖怪はこの魍魎の仲間である。また、幽霊は人が死んで朽ち果くてて土になったものである。その朽ち果てた人の悪い気が集まって形を作って幽霊となつてあらわれる。幽霊は切ろうとしても切れず、つかまえようとしてもつかまえられないものではない。

また、キツネやタヌキなど動物の妖怪は、すぐに人に悪い誘惑ゆうわくを

して殺そうとする。ただし、豪傑の武士のように心が強い人だけは、心が惑わされることがない。心が清らかでいさぎよければ、キツネやタヌキもだますることができない。臆病で心が弱い者は、枯れ木を見ても幽霊だと思っておびえる。これは、心がしっかりしておらず迷い乱れているからであり、武士にとって恥ずかしいことなのだ。

このようなうすだから、僧侶たちは臆病な武士が幽霊をこわがることを利用している。魔よけの札というものを作り、九字というお祓いの呪文を設けて臆病な腰ぬけ武士たちをだましてお金もうけをしている。

その臆病な武士たちは、僧侶たちが作ってくれた札を持てば妖怪や幽霊に会うこともなく、いろいろな災いや病からも守ってくれると信じていた。九字という呪文を唱えれば、どんな天狗や悪霊も退治してもらえると思い、安心して少しの間をすごしている。

ここに集まった怪談話は、余《大聖寺藩主の前田利考》の近くに仕える家来が語ったままに、内容の無いものはやめて中身のしっかりある話を選び、この本に書いたものである。

※2「怪力乱神を語らず。」という孔子の言葉もあるが、じつに、小さい子供に話す怪談として集めたのである。

寛政十一年《一七九九》正月

※1『九字』…修験者などが、災害などを払うまじないとして唱えた九文字の文句。「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」と呪を唱え、指で空中に縦四本、横五本の線にかく。中国の道家で行われていたものが、日本の陰陽道や仏教の密教に伝わったもの。

※2『怪・力・乱・神』…怪異（不思議なこと）・勇力（力があること）・はい乱（正しい道に背くこと）・鬼神（神秘的なこと）の4つを意味している。出典となった「論語」に「子、怪力乱神を語らず」とあり、孔子はこうした人間の認識では説明できないことがらについては語らなかったという。

◆前田利考◆（一七七九～一八〇五年）

六代利精の長男で、天明八年（一七八八）、わずか一〇歳にして八代大聖寺藩主となった。学問を好み、詩文や画が堪能であった。歴代藩主の中では名君といわれ、乱れた藩政を立て直すために組織内部を正し、質素儉約による財政再建、武道の奨励などを行った。また、家臣の意見に耳をかたむけて自分に過失があるときは改めるという態度で、藩政に臨んでいたが、文化二年（一八〇五）に二七歳の若さで亡くなった。

【現代語訳】 聖城怪談録 上 目次

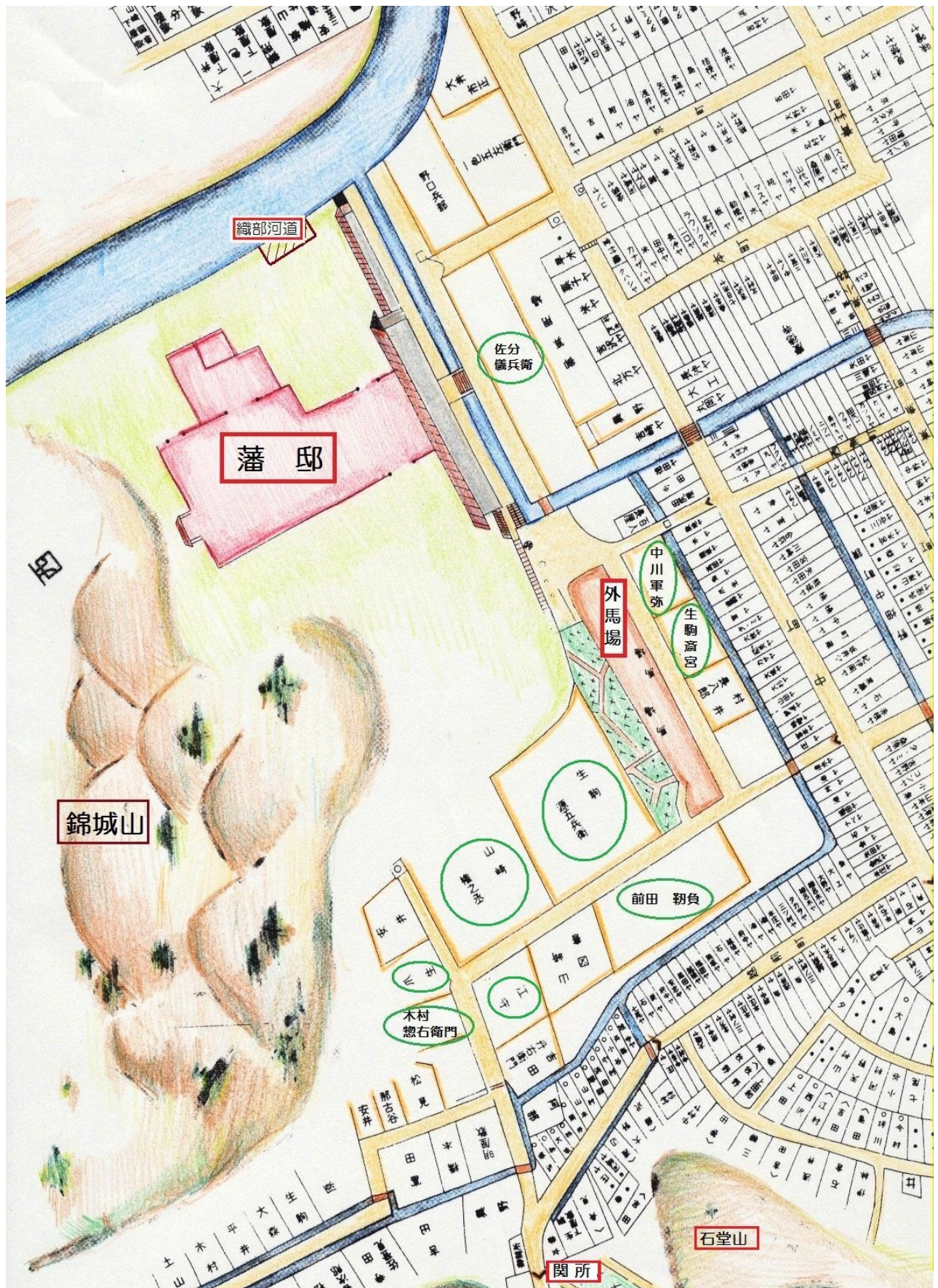
一、村井矢柄、カモとりであやしいことにあう	……	7	一八、大井佐五右衛門、ムジナをつかまえる	……	18
二、関町半兵衛、火葬場 ^{かそうば} であやしいことにあう	……	8	一九、野尻興三左衛門、ヒヒをつかまえる	……	19
三、山井甚右衛門、ユウレイにあう	……	9	二〇、瓜生伝の乳母の母が山奥でヒヒにであう	……	20
四、中村清太夫、鼻をつままれる	……	9	二一、渡辺六左衛門が疫病神 ^{やくびようがみ} を切る	……	21
五、土山金吾、右村で頭をたたかれる ^{みぎむら}	……	10	二二、山本太郎左衛門、あやしいことにあう	……	21
六、田辺多門、大女にあう	……	10	二三、成田弥左衛門の父が吸坂村で不思議なことにあう ^{すいさかむら}	……	22
七、瓜生伝、ツチノコにあう	……	11	二四、瓜生伝の乳母 ^{うば} の夫があやしいことにあう	……	23
八、中沢十郎太夫、永町 ^{ながまち} で道をさえぎられる	……	12	二五、土山金吾があやしい火を見る	……	24
九、小原長八、畑の火にあう	……	13	二六、瓜生伝、坂で化かされた人を見る	……	25
一〇、秋野清右衛門、河崎にて網をかけあやしいことにあう	……	13	二七、岩原武左衛門、山姥 ^{やまんば} にであう	……	26
一一、大江相模守「天狗 ^{てんぐ} つぶて」にあう	……	14	二八、浦上治部蔵、人を傷つけようとした	……	27
一二、林多門の妻、大女を見た	……	15	二九、吉崎屋甚左衛門の家来、オオカミにあう	……	28
一三、木村惣左衛門の妻が馬場 ^{ばば} であやしいことにあう	……	15	三〇、逢坂清右衛門が火の玉にあう	……	30
一四、奥村司、馬場であやしいことにあう	……	15	三一、清右衛門、萩生村 ^{おぎゅうむら} あたりでキツネがつくのを見る	……	30
一五、梅田清左衛門、山鳥の火を見る	……	16	三二、殿様のお住まいで、「はう子人形」が歩く	……	31
一六、瓜生伝の母、火の玉にあう	……	16	三三、田丸兵庫の家、「はう子人形」のあやしさ	……	32
一七、熊坂村の石坂あたりの住民、コワイ目にあう	……	17	三四、瓜生伝、鹿島 ^{だいじや} で大蛇を見る	……	33
			三五、勾坂 ^{へび} という人、蛇がウサギをのみ込むのを見る	……	34

聖城怪談録 下 目次

三六、嶋屋喜兵衛、石堂山にて化け物とたたかう	………	34	九、二松甚五左衛門、不思議なホタルを見る	………	51
三七、山場藤八、夜中に化け物とたたかう	………	36	一〇、加茂村の農民、化け物にあう	………	52
三八、菩提村の肝煎が那谷の辺りで化け物にあう	………	37	一一、牛田千次が鬼火にあう	………	53
三九、土山十郎左衛門が女の生霊になやまされる	………	38	一二、山代村あらやの家来が化け物にであう	………	54
四〇、草鹿部が乳母のユウレイにあう	………	39	一三、児玉仁右衛門、キツネにであう	………	55
四一、越前屋善三郎の妻、ユウレイになる	………	40	一四、竹内宅右衛門がキツネの火をみる	………	56
四二、大森小治兵衛が杵の化けたのを見る	………	43	一五、伊藤平右衛門が山中の道であやしいことにあう	………	57
四三、勝木惣右衛門が夜中にあやしいことにあう	………	44	一六、大野才記の家に、化け物が来る	………	57
			一七、橋立村の農民がムジナを生け捕る	………	58
			一八、塩浜村の農民が古ダヌキを殺す	………	60
一、田辺多門、夜中にあやしいことにあう	………	45	一九、山崎家の家来の高山治兵衛、不思議なことにあう	………	61
二、清瀬という局がコワイ目にあう	………	45	二〇、毫撰寺で不思議なことがある	………	62
三、島田伴蔵兄弟が不気味なことにあう	………	45	二一、山崎多宮、不思議なものをみる	………	62
四、田辺多門、あやしい音楽を聞く	………	47	二二、怪力の大井佐五右衛門	………	63
五、島田幾之進が疫病の神にあう	………	48	二三、岡本登、川崎で竜が天に昇るのを見る	………	68
六、広田熊蔵、不思議なものを見る	………	49	二四、室田弥兵衛の屋敷で物干しざおが天に昇る	………	69
七、時枝勘右衛門の家に怪人が現れる	………	49	二五、片谷村の者が仏様を信じて狂う	………	69
八、高木与右衛門が山姥の糸を拾う	………	50	二六、橋立村の泉之間に大亀がいる	………	70

二七、西村新四郎が橋立村の番所であやしいことにあう	……	71
二八、長局 ながつばね にて女の人があやしいことにあう	……	72
二九、吉田丹右衛門の下女、あやしいものを見る	……	73
三〇、永町の夜回りをしていたものがつかまる	……	74
三一、魚屋弥兵衛が八間道 はちけんみち でうなじをつかまれる	……	74
三二、長沖屋治兵衛が慈光院 じこういん の辺りで気味の悪いことにあう	……	75
三三、坂井数右衛門が畑山で化け物にであう	……	75
三四、木村右膳の家来が白サギの化け物を生け捕 と る	……	76
三五、木こり（そま）の三郎、化け物に投げられる	……	77
三六、深田村 しやうみやうじ の称名寺の使いの者が化け物にであう	……	78
三七、深田村九次郎、あやしいことにあう	……	79
三八、大幸百助がキツネのとったカモを集める	……	80
三九、冨塚村孫右衛門、あやしいことにあう	……	81
四〇、慶徳寺 きやうとくじ の井戸から火が出る	……	82
四一、夜の御書院 ごしよん であやしい音がする	……	83
四二、坂井弥四郎の祖母が山中温泉でお化けを見る	……	84
四三、目の見えない養順、天狗をこわがる	……	84
四四、日谷村 ひのや の七右衛門、だまされる	……	85

四五、国本四右衛門、化け物になげられる	……	86
四六、勅使村願成寺 ちやくしむらがんじやうじ の住職、ユウレイにあう	……	87
四七、森田長左衛門、大女を見る	……	88
四八、榎田玄覚、あやしいことにあう	……	89
四九、桶屋平右衛門、桂谷道 かつらだに であやしいことにあう	……	89
五〇、寺田木工、黒入道 くろにゅうでう をみる	……	91
五一、町屋の者、山中道で不思議なことにあう	……	91
五二、佐藤弥吉、大入道 おおにゅうでう をみる	……	93
五三、古川孫右衛門、いろいろな不気味なことにあう	……	93
五四、月津村興宗寺 つきづむねしうじ の新しいお坊さん、不思議なことにあう	……	95
五五、村井矢柄、「おこり」の神をぶんなぐる	……	95
五六、竹内半左衛門、鳥打坂であやしいものを見る	……	97
五七、ある者が山でコワイ目にあう	……	97
五八、深町内匠、狩りに出かけてあやしいことにあう	……	98
・この本をまとめた家臣のあとがき	……	101
・聖城怪談録 解説（大聖寺藩史談より）	……	102
《付録》聖城怪談録に出てきた村の配置図・大聖寺町内地図	……	103
江戸時代の時刻・長さ距離	……	104



天明の頃の大聖寺藩邸周辺の地図

は『聖城怪談録』に出てくる家臣の家や場所。

「天明六年大聖寺絵図」(『加賀市史 通史上巻』付録)より加工。

聖城怪談録 上

一、村井矢柄、カモとりであやしいことにあう

村井矢柄むらいやへいという人が、ある夜「※かけもち」を仕掛けしかにでかけま

した。この「かけもち」という

のは、トリモチをぬった糸を土
手の上に張っておき、夜通し見
張って、トリモチにくっついた
カモをとることです。

さてその夜中ごろ、暗くてぼ
んやりとして物の色も見えな
いとき、池の上の山から、何だ
か大きなものが下りてくるよ
うに見えました。

それで矢柄は、きっとオオカ
ミでもいるのであろうと身構みがま
えて待っていたところ、それが



少しずつ近づいてきたので、矢柄はそのまま刀をぬいて切りつけ
ました。カッシ、と手ごたえがあつてネットリした血のようなも
のが多くながれました。そこで（よし、しとめたぞ。）と思い明り
をつけてみました。するとそれはオオカミではなく、トリモチを
つけた糸が巻きつけられた柁わくを二つに切り割ったものでした。

たいへん不思議なことだったので、

（何者のしわざだろう。こんなときは、長くいるものでは
ない。）

と思って、そのまま片づけて帰りました。

家へ帰ると、朝のカモとりによく時間になったので「坂」
というカモの坂網さかあみりょうをする場所へ出かけました。その途中
の「大坂」おおさかという坂道の下に行くと坂道の途中あたりで女
の泣き声がします。

（それにしても、今夜は行く先々で不思議なことがある。
これもまた何かにかかわれているものだろう。）

と思って、その坂を通らずに「伊織坂」いおりざかという坂道からの
ぼり、「鳥打坂」とりうちざかという獵をする場所に着いて休んでいまし
た。そこへ間もなく山口半左衛門やまぐちはんざえもんが、あの「大坂」こを越え

て来たので矢柄は聞いてみました。

「何か坂の途中で、変わったことは無かったでしょうか。」

「べつに変わったことは無かったですが、坂のわきに一人の女が住んでいました。不思議に思っ**て**彼女のそばに近づき、ようすを聞くと、『以前に我が子^わを亡くしてここにほうむりました。しかし、あまりに子どものことが忘れられずにどうしようもなく、毎夜、この墓に来て一晩中、子どもの相手をするつもりでこのようにしております。』と女は答え、またさめざめ泣いていました。」

と半左衛門が話したので、矢柄は半左衛門を肝^{きん}つ玉のすわった人だと感じました。

※『かけもち』：トリモチを藁^{わら}に塗^ぬったり、水草の繊維^{せんい}でつくった縄^{なわ}に塗^ぬって、地上、木の上、水田の中、池沼の水^{みづ}上などに設置する方法でカモなど鳥類の捕獲^{はくわく}に長く使用されてきた。トリモチで猫^{りよう}を行うことは現在では禁止されている。

二、関町半兵衛、火葬場であやしいことにあう

関町半兵衛とよばれる者が、ある夜に敷地村^{しきじむら}の火葬場^{かそうば}を通^かった

ときに、火葬場に火が見えました。

（これは、きつと少し前に人を火葬した火であろう。）

と思^よい近寄^よってみましたら、火の中から女の人の声^{こゑ}がして

「私は敷地の肝煎^{きんいり}の娘^{むすめ}です。」

と言^いいました。半兵衛はとてもおどろいて、その場を足速^{あしはや}に通^かり過ぎました。

さて、あまりに不思議だったので敷地村^{しきじむら}に行^いって肝煎^{きんいり}の家へ立ち寄^より、何かあつたのかようすを聞くと、なんと、娘^{むすめ}が死んだので、その日にほうむったということでした。あやしいでござことです。



敷地町火葬場あとの碑

※『肝煎』：村長のようなもので村の最高責任者である。村人が農業に精^{こころ}をだし、年貢^{ねんぐ}をきちんと納めるように指導し、あわせて防犯^{てんぱん}の徹底^{てつてい}にあたっていた。大聖寺の町肝煎^{まちきんいり}は、藩主^{はんしゅ}の必要品調達^{ひやうひんてうたつ}や藩主とその一門の送迎^{そうおう}、宿の手配などもやっていたという。

三、山井甚右衛門ユウレイにあう

やまいじんうえもん
山井甚右衛門という人が、ある夜、家の居間^{いま}で横になって休んでいました。夜中にふと目が覚めると、青々とした坊主頭をしたお坊さんのような人が押入れの戸を開けて現れ、部屋を出ていくのが見えました。甚右衛門はすぐに起き上がると、お坊さんの後を追って部屋から出て見たのですが誰もいません^{だれ}。

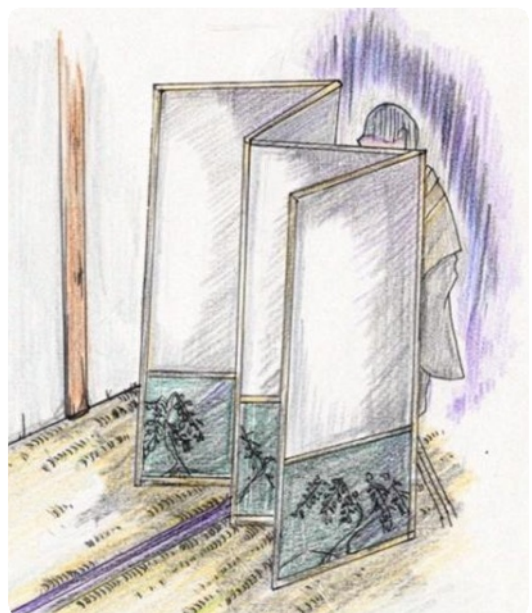
またその後も、夜中にかぎって前に見たあのお坊さんが、外から部屋へ入っていくのを見たというのです。そしてまたある日は、屏風^{びょうぶ}の上から頭だけを出しているのを見たといいます。

もともと、その座敷^{ざしき}は山代の泉光寺^{せんこうじ}《専光寺^{せんこうじ}のこと》^{いんぎょ}の隠居したお坊さんの居間でした。そのお



山代温泉 専光寺

坊さんが亡くなつたあと、座敷にユウレイがいつも出たといひます。それで建物が売りに出されて、甚右衛門が買って建てた居間だということです。



四、中村清太夫、鼻をつままれる

なかむらせいだゆう
中村清太夫という人が、ある夜に稲垣五郎左衛門^{いながきごろうざえもん}の屋敷^{やしき}の横にある石橋の上を通りかかったとき、どこからか分からないが鼻をつままれました。清太夫はおどろいて、手で鼻をはらうとつまむのが止^やまりました。また行こうとすると、鼻をつままれます。同じことが三度あり、あまりに不思議に思っ^{ほり}てその橋を通らずに、近くの堀^{ほり}を飛び越^こえて通ると、何も起こりませんでした。

この話は、瓜生^{うりゅうつとむ}伝^(か)という人が本人から直接聞いたといひます。

五、土山金吾、右村で頭をたたかれる

つちやまきんご とうむらでかぶ とうむらでかぶ
土山金吾が鳥打坂からもどつて、右村にあるお堂のところを通
つたとき、何者かわからないが金吾の頭をたたきました。金吾は
おどろいて振り返り、

「誰だ、どうして私の頭をたたくのか。思い知らせてやるぞ。」

とどなりました。すると、少し後ろからいっしょに来た留田孫助が、
とめだまごすけ

「何を一人で言っているのですか。」

不思議に思つて聞くので、あつたことを話して二人で不思議な
ふしぎ
ことだと思つていました。

それから二人連れで帰ると、しばらくしてまた前のように打た
れたのですが何者も見えません。このようなことが三度あつたと
かいいいます。

のちに、このような不思議なことにあつたと他の人にも話した
といひます。

六、田辺多門、大女にあう

たなべたもん このさま おやしき
田辺多門が、春、桜が満開のころに殿様の御屋敷の外にある馬場
ばば
《乗馬の練習をする広場》を歩いていると、馬場の真ん中あたり

から大きな女が来るのが見えました。多門は、（それにしても大き
な女だなあ。）と思ひながら歩いていくと、その大きな女は、馬場
の土手を簡単に一またぎ越えて、外の道へ出ていきました。多門
はこれを見てとて

もおどろき、そのま

ま追いかけていつ

たのですが、もう誰

もいませんでした。

また、山崎
※1 やまざき

権丞の家来に片岡
ごんのじょう かのおか

文太夫という人が
ぶんだゆう

いました。ある夜、

権丞の家の門の前

に行こうとしたと

き、非常に大きな女

が前を歩いており、

えもりおりと
江守織人の屋敷の

たけがき
竹垣をまたいで越えていきました。



『大聖寺藩史談』『聖城怪談録』より

同じようなころ、小谷五郎兵衛という人が、鷹狩りのタカの世話番を終えて帰る途中、馬場を通ると、とても大きな女が馬場の土手に座っているのを見ました。

その後また、五郎兵衛が夜中にタカの世話を終えて外馬場を通るとき、(また何か起りはしないか。)と非常にこわくなっていたところ、大男と大女が五間《約9m》先を歩いていました。五郎兵衛は、

「私は、主人の用でここを通るのだが、この場所ですのような行いをしていると処罰されるぞ。」

と声をかけて叱ると、二人は生駒の屋敷の横にあるムクゲの垣根の中に入り消えていったということです。

《同じような話が『大聖寺の伝説と民話・第五集』にあります。》

※1『山崎権丞』…前田利治が大聖寺藩をはじめた時、金沢から家老として付いてきた家で、代々、権丞を名のり千石を受ける。先祖は長く仕えた越前朝倉氏がほろび、信長を殺した明智光秀に従って敗れるなど苦労したが、前田利家に従って金沢で一万七千石を受けた。近くには生駒、前田鞆負ら家老の家があった。

※2『生駒の屋敷』…家老職の生駒家と考えられる。先祖は下総の結城朝光の子孫という。名を吉田と改めて織田信長に仕え、信長に生駒の姓をもらい、

後に信雄、関白秀次などに仕えたが主人が滅び京都にいたところを、前田利長によって五千石で召し抱えられた。その子監物が利治につき従って大聖寺に来て家老を務め、以後代々、大聖寺藩家老となり、千百石を受けた。

七、瓜生伝、ツチノコにあう

瓜生伝という武士が弟の軍平と、下川《藩邸より下流の川》へ船で行きましたが、「織部河道」という船着き場から上がって帰ってきました。ちょうど夏ごろの夜中の二時すぎあたりで、御屋敷の外馬場を通っていたときのことでした。

そのときは、おぼろ月夜で物の形がはっきり分かりませんでした。外馬場の内側の真ん中あたりから、突然、前の方に黒くて丸い一尺五寸《約四五cm》ぐらいの長さのものが、コロコロと動いていきました。伝兄弟は不思議に思って、持っていた舟のサオでたたこうとしたのですが、馬場の角の、ムクゲの垣根の中に入っていなくなっていました。



ツチノコ・想像図

はぎわらげんきょう

同じころ、萩原玄恭という町人の医者がいました。この人は

きむらそうざえもん

よはなし

木村惣左衛門の所へ夜話をしに行ってもどる途中、伝が以前に見

※2 まえだゆきえ

たようなものに、前田鞆負の屋敷前で出会いました。玄恭は小心

者だったのでひどくおどろき、そのまま逃げ帰って惣左衛門の家

に泊まり、翌日になって自分の家に帰ったとか聞きます。

ある人の言うには、これらはツチノコというものだそうです。

※

※1『織部河道』…御河道ともいう。藩用の物質を川船に積んだり、降ろした

りした船着場のこと。

※2『前田鞆負』…四代大聖寺藩主利章の二男の前田中務が、兄である五代藩

なかつかき

主利道の家来となり、以後、大聖寺藩の家老を務め千二百石を受ける家とな

った。この鞆負は中務の孫で文政六年（一八二三）に家老になる。

※3『ツチノコ』…日本に昔から生息するといわれているUMA（未確認生物）

で、ヘビにしては胴が太く長く、鎚に似た姿だという。

八、中沢十郎太夫、永町で道をさえぎられる

なかざわじゅうろうだゆう

いこまさいぐう

中沢十郎太夫と生駒斎宮の二人がいっしょに、上川《藩邸より

かみかわ

上流の川》へ魚をとりに行きました。十郎太夫は夜の八時ごろ帰

かわざいく

ったのですが、永町の皮細工をつくる所の曲がり角の近くに来る

かど

と、何でもないのにその曲がり角までは行けません。前へ進もうとしても足が進まず止まってしまいます。

後ろから斎宮が来て、

「何をしているのだ。」

と聞いてきたので、十郎太夫は、今起こったできごとを説明しました。

斎宮はその話を信じずに、

「なんでそんなことがある、あるはずがない。私が行こう。」

と、つかつか行こうとしました。けれども、斎宮が曲がり角に近づくと、何となくそれ以上は進めなくなり足が前に出なくなりま

す。二人は交代しながら行ってみようとしたが、前へ進むことができませんでした。それで二人は相談して同時に走り出してみると、スツと出られました。それからは何も変わったことは無かったということです。まだ、暗くなり始めたところで、あたりの家にはみな明りがついて、こわくも無い時間なのに何のしわざか分からなかったといえます。

九、小原長八、畑の火にあう

はたやま

大聖寺の北に旗山《畑山のこと》というところがありました。

そこでは夜になるといつも火の玉が飛んでいました。

おはらちようはち

あるとき、小原長八が鳥打坂へ行こうと明け方に畑のあぜ道へ

とりうちざか

さしかかったとき、あの火の玉が長八の前を飛んでいったのです。

でしきよう

長八は度胸のある性格だっ

せいかく

たので、その火に追いついて

しっかり見たいと思い、夢中

になって追いかけてましたが、

火の玉は畑にある古い神社

たけやぶ

の近くの竹藪のなかへ飛ん

でいってしまいました。その

ときに火が竹に当たりカラ

カラと音がしたといいます。

火の玉はそのまま見えなく

なってしまったということ

です。

《同じような話が『大聖寺の

伝説と民話・第一集』にあります。》

一〇、秋野清右衛門、河崎にて網をかけあやしいことにあう

あきのせい えもん

秋野清右衛門が、河崎村の川へ魚とりにでかけました。そうし

あみ

ているうちに川の中に網が引っかかってしまい、引いても引いて

も網が取れません。清右衛門はどうしたらよいのかと困ってしま

いました。

ところで、清右衛門の家には河崎村に住む家来がいました。ち

ょうどその夜、その家来は河崎村の自分の家で休んでいましたが、

困っていた清右衛門のところへやってきました。

清右衛門が、網の話をするの家来は同情して、

「私が川に入って網を取りはずしましょう。」

と言い、そのまま川へ潜っていきました。清右衛門はうれしくな

って今か今かと家来が出てくるのを待っていました。が、ぜんぜん

水から出てきません。これはおぼれて流されてしまったのだと思

いました。

あやま

もうしわけない気持ちで、まずは家来の家族に謝ろうと、家来

の家を訪ねていきましたが、なんとその家来が家にいます。彼は、



畑町の八幡神社



下河崎町と大聖寺川

昨日の夜はどこへも出
かけずにずっと家にい
たと言います。清右衛
門は昨日のことを家来
に話すとお互いに不思
議なことだと首をかし
げました。
次の日、網を取って
帰ることにしましたが、
何にも変わったことは
起こらなかったとい
います。

一一、大江相模守「天狗つぶて」にあう

夜中に、どこからともなく小石を投げつけられることがありま
した。これを世の中では「天狗つぶて」といいました。

ある夜のこと、敷地^{しきじ}《菅生石部神社^{すがういそべ}》の神主^{かんぬし}の大江相模守^{おおえさがみのかみ}が夜話^{よばなし}
にでかけ、夜中ごろに帰ろうとして、途中^{みちのうへ}の藤の木^{ふじのき}のあたりを通



菅生石部神社

ったときのことです。山の上から小石をどんどん投げつけられま
した。石が足元に落ちるので立ち止まってよく見たのですが、な
んと石は一つもあり
ません。川へ落ちる
石を見ると、水の波
はできても石は見え
なかったというので
す。
うりゅうつとむ
瓜生伝のお母さ
んも、ある夜に殿様^{とのさま}
の御屋敷^{おやしき}の外馬場近
くで、足元に小石を
投げつけられて、た
いへん困ったとい
います。

一二、林多門の妻、大女を見た

はやしたもん

のうだいじろう

林多門の奥さんは、能田才次郎の妹です。その奥さんが、まだ

お嫁に行く前のことです。

なかがわぐんや

中川軍弥の家に行つて、夜中に手洗いに行きました。手洗いで



向かいの方にある

垣根を見ると、垣

根の上に大きな女

の顔が見えました。

多門の奥さんは生

まれつき度胸があ

る女性で、おどろ

いたようすもなく

その大女を見ていました。

大女は すこしずつ近寄つてきて、手を洗う鉢のあたりにくる

と大女の顔だけが迫つてきました。

そして、みるみるうちにどこかへ消えてしまったとか聞きました。

た。

一三、木村惣左衛門の妻が馬場であやしいことにあう

あなむし

きむらそうざえもん

そとばば

《穴虫に住む》木村惣左衛門の奥さんが、ある夜、外馬場の近

くを通りかかったときに、松の木の上から奥さんの頭の上に何か

がシューツ、という音をたてて落ちてきました。頭にその何かが

落ちてきたときは、体全体へ、しみ込むような感じだったそうで

す。手を上げて頭をさわつてみたのですが何もありませんでした。

そのまま奥さんは、家に帰りましたが頭痛がひどくなり、その

あとで髪の毛が全部ぬけてしまったそうです。このことは、他の

人みんなが見たということでした。奥さんの髪の毛は後でちゃん

と生えてきたということです。

一四、奥村司、馬場であやしいことにあう

おくむらつかさ

とのさま おやしき

奥村司という武士が夕暮れに殿様の御屋敷から帰りました。そ

の途中、御屋敷の外にある馬場の近くで、馬場の上の方はあるか雲

の上に、大小二本の刀を腰にさした侍が提灯を手に持つていく

姿が見えました。司はそのとき、子どもの使用人に提灯を持たせ

ていっしょに帰っていましたが、その使用人も同じ侍の姿を見ま

した。この話は、奥村司が殿様の御前でお話申し上げたものです。



一五、梅田清左衛門、山鳥の火を見る

ある朝の六時すぎ、梅田清左衛門うめだせいざえもんという人※じこういんが、慈光院じこういんの山ほのおのあたりを見ました。そのとき山の上の近くに炎が飛びまわっているのが見えました。(何の火だろう。)と見ると鳥の形をしています。注意深く見ると、それは山鳥でした。鳥の頭の赤い羽根はねが火に見えたのです。

山鳥が炎に見えるということは多くの人が言っていますが、正確に見たものはいません。清左衛門が見たので山鳥が火に見える証拠しょうこにできるでしょう。

※『慈光院』：真言宗の寺院で、
 応永五年（一三九八）に越前の
 滝谷寺たきだんじの僧が、錦城山きんじょうざんの西方の
 山に大聖寺を建設したといわ
 れる。天文年間（一五三二～五
 五）の朝倉義景との戦いで焼失
 し、現在の寺町あたりに寺院を
 再建して大聖寺慈光院といっ
 た。

そして「山ノ下」に移された
 後、神仏分離政策で本尊は山代
 薬王院に移り寺院は姿を消し
 た。あとの地に慈光院に属して
 いた加賀神明宮（山下神社）が
 ある。



加賀神明宮（山下神社）

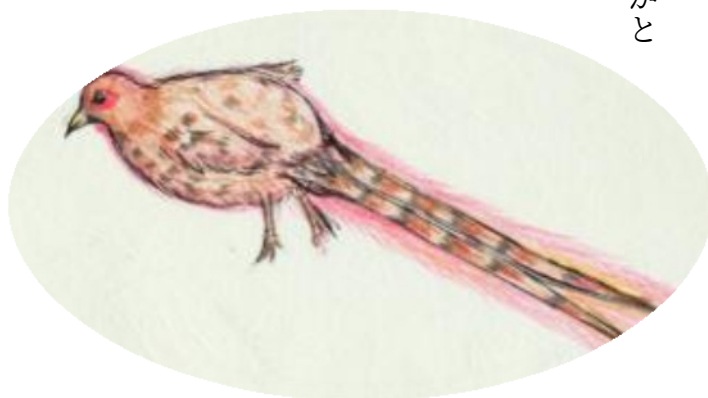
一六、瓜生伝の母、火の玉にあう

瓜生伝のお母さんが山の下あたりで見たのは、毎晩まいばん、火の玉※
 六尺しやく《約一、八m》上を飛んでいくものでした。

その後、福嶋源次郎ふくしまげんじろうという人がとても年をとった山鳥をつかま
 えました。それからは、火が空を飛ぶのは見えなくなり、これら

もこの山鳥が正体だったのではないかと
いうことです。

※『山鳥と火の玉』：夜に山越えをして飛ぶ
山鳥の中でも尾に一三の斑点があるものは
その時、人魂ひとたまのように赤くなつた尾が引く
ので火の玉に見えるという伝承がある。サ
ギも夜、体が青白く光るといい、昔からいろ
いろな地方でよく目撃もくげきされているという。



一七、熊坂村の石坂あたりの住民、コ

ワイ目にあう

熊坂村の石坂という所に住んでいる二人の人が、越前国えちぜんのかくに《現在
の福井県東部》との境にある七廻りななまわという所の山へ、畑仕事に出
かけました。夕方になってきたので一人が

「畑仕事を片付けて、そろそろ帰ろうか。」
かたづ

と言ったのですが、相手は

「まだ終わってないから、もう少し残って仕事していくよ。」

というので一人で先に帰ることにしました。

山道を帰っていくと、前の方からとても大きな女の人が髪を振かみ
り乱みだしながらこちへきます。その女の髪の長さといったら地面
につきそうなくらいで、口では言い表せないくらいおそろしい姿
でした。あまりにおそろしいので、その人は女の顔も見ないよう
に通り過ぎ、足早に帰っていきました。

帰る途中に、（畑に残つ
いぢゆう

たもう一人の方はどうな
ったか。）と心配になりま
したが何もできないまま、
ようやく村に帰り着きま
した。

そしてすぐに、村の人を
連れて迎えにいきました
が、彼は畑より少しはなれ
た田んぼの中で死んでい
たのでした。その死体をよ
く見てみると傷もなく、少



熊坂よりこの先の福井県境への道に『七廻り』があった。
ジグザグに登る道だったが、今は国道八号線が通る

しも変わったところがありません。これは絶対に、山姥やまんばのしわざだと思いました。その姿を見ておそろしくて死んでしまったか、山姥に殺されたのだというのですが、本当のことはわかりません。これは、瓜生伝うりあうつぎが語ったお話です。

一八、大井佐五右衛門、ムジナをつかまえる

あるとき、大井佐五右衛門おおいさごうえもんが度胸どきょうだめしに犬を連れて夜中に山の中を歩いていたときのことでした。どこか山の奥から、かすかにカネをたたく音がチーンと聞こえてくるので、その場所を探して行きました。すると、むこうの方にお坊さんが一人で、木に座ってカネをたたいていました。そのようなすは何となくあやしいものでした。そこで犬をけしかけると、そのお坊さんは持っていたカネをたたく棒ぼうで犬の頭をたたくので、犬はおそいかかることができませんでした。そのようなことを二、三度くり返しましたが、犬がおそおうとするたび、お坊さんは棒でたたくのです。佐五右衛門は、これは簡単かんたんに退治たいじすることはできないと考え、覚悟かくごを決めました。

(また犬をたたくなら、自分が飛びかかってやろう。)



『大聖寺藩史談』『聖城怪談録』より

そして犬をけしかけると、うまくそのお坊さんのノドに食いついて殺すことができました。そこで、その死体を見ると人間の姿に変わりありませんでした。だが人間ではないだろうと、佐五右衛門は近く

の木にその死体をしばりつけて帰りました。翌日よくじつ、見に行ってみました。が、やっぱり人間の姿のままでした。

これには佐五右衛門もおどろいてしまって、(ああ、思いもよらず人を殺してしまった。ひどいことをしたなあ。)

と思いながら、しばらく見ていました。
するとその死体の姿がしだいに変わ
っていき、ついには大きなムジナ[※]にな
ったと聞いています。

※『ムジナ』：主にアナグマのことをさす。

イタチ科の動物で外見がタヌキによくにて
いる。昔はタヌキのことをムジナと記した
ものもある。民話等ではキツネやタヌキと
並び、人を化かす妖怪としてかかれること
が多い。



アナグマ

一九、野尻与三左衛門、ヒビをつかまえる。
野尻^{のじりよざえもん}与三左衛門^{どきよづ}も同じように、度胸^{どきよづ}だめしに日谷村^{ひのやむら}の山の奥へ
でかけたときのことです。

もう夜中になるころなのに、前のほうのクワの木に誰か座って
いる人がいました。よく見てみると、老女^{ろうじょ}が髪^{かみ}をとかしていたの
です。その髪はボサボサにみだれて地面へついてしまうほど長い
ものでした。

これは、きっと化け物^{ばけもの}だろうと考え、犬をけしかけてみよう

思っけしかけると、その老女はクワの木の枝で犬をたたくので
近寄れませんでした。何度犬をけしかけても、枝でたたいてしま
うので老女に近寄れません。

与三左衛門は、前に友達から

「日谷の奥に夜中に行ったとき、化け物のような老女がでてきて、
犬をけしかけたのだが退治することができず、悔^{くや}しい思いをし
て帰ってきた。」

と聞いたのを思い出し、きっとこれがその老女なのだろうと思い
ました。

自分も、友達のようにこの化け物を殺せずに帰るのは悔^{くや}しいの
で、どうにかして退治したいと思いました。幸運なことに、家来
にヤリを持たせていたので、

「さっきのように犬をしかけるので、あいつがまた犬を枝でたた
くのなら、その隙^{すき}にお前が続いてヤリでつくだ。くれぐれも
油断^{ゆだん}するなよ。」

と家来に言いました。自分も勇^{いそ}みながら犬をしかけると、犬はい
きおいよくおそいかかったので、なんなく老女のノドに噛^かみつく
ことができました。

家来もそのままヤリでついでとどめをさしました。

そして、その老女の体をよく見てみましたが、人間によく似ていました。たが人ではなく、いわゆる「[※]ヒビ」といわれる大きなサルのようなものでした。すぐに、

そのヒビの毛を切り取って帰ると、友達にヒビの化け物^{ばもの}を退治したと喜んで見せて、お祝いにお酒をふるまったといっています。

ヒビの毛を床の間の釘^{くぎ}にかけたのですが、とても長く畳^{たたみ}の上まではみ出るほどでした。その毛がこの家に伝わっていたのですが、その後、年月がたつて家が火事になったときに、焼けてなくなっ



『大聖寺藩史談』『聖城怪談録』より

てしまいました。それで、話だけが伝わっているということです。

《同じような話が『大聖寺の伝説と民話・第二集』にあります。》

※『ヒビ』：日本に伝わる妖怪。サルを大型化したような姿をしており、老いたサルがこの妖怪になるともいわれる。また人のような形をしていて、髪の毛が長くすばやく行動し、人間を襲って食うこともあるといわれる。

二〇、瓜生伝の乳母の母が山奥でヒビにであう

瓜生^{うりめうつとむ}伝^{うば}の乳母のお母さんの話です。その人は日谷村^{ひのやむら}の人で、あるとき村の山奥へ、柴刈^{しばか}りに出かけると、前のほうから何か向かって来るのが見えました。(何だろう。)と上のほうを見てみると、それはサルのような姿をしているのですが、サルよりとても大きくて、毛が長く地面についていました。

その人はとてもびっくりして逃げるように帰って、村の人に見たことを話しました。すると、村の老人たちが、

「それは、ヒビだ。またヒビを見ることがあるかもしれないが、その場に長くいると必ず殺されてしまうから早く逃げ帰りなさい。」

と言ったそうです。

二、渡辺六左衛門が疫病神を切る

《二代前の今は亡き》渡辺六左衛門という人が、流行病で苦しんでいました。高熱があり、寝込んでいましたが、ある日、ふと起き上がると枕元においてある脇差《短い刀》を急に手に取り、スルリと鞘からぬいて、台所の方へ人を追いかけるようにして走り出しました。そして、台所にかかっているのれんを刀で切りつけると、そのままおれてしまったのです。

家の人達はびっくりしながら、あわててたおれた六左衛門を寝室まで運んで介抱しました。そして、

「どうしてこんなことをなさったのですか。」

とたずねたのですが、主人がなんと話しているのか分かりませんでした。

しかし、そのできごとがあった後から、病気がだんだん良くなっていきました。病気が治った六左衛門は家の人に、

「さて、こないだは不思議なことがあった。熱にうなされていたので夢か現実かわからないが、疫病神を見たのだ。それで、刀を手にとってその疫病神を追いかけて切りつけたのだが、確かに手ごたえがあったと思う。しかし、覚えているのはそこまで

で、後は気がつくとおれていたのだ。」

と語りました。家族はその話を信じていませんでしたが、彼の刀をぬいてみると、確かに、何かを切ったような刃のゆがみが少しあります。みんなはその刀を見ると（これは本当に疫病の神を切ったのではないか、不思議なこともあるものだなあ。）と思いました。

そしてすぐに、その刀を山本浅之進の家に預け、今に伝わっているということでした。そしてまだ、その刀のゆがみは残っていると語られています。

三、山本太郎左衛門、あやしいことにあう

山本浅之進のおじいさんである太郎左衛門に、庄太夫という弟がいました。

あるとき兄弟でいっしょに川へ行こうとでかけました。このときは夜からでかけました。魚をとる網と、突くヤスを持っていたのですが、南郷村の住吉神社のあたりで少し休んでいくことにしました。

ヤスをそばの田のあぜに突きさして立て、タバコを吸ったりし

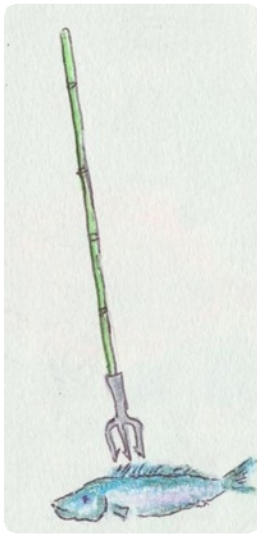
てしばらく休んだあと、さあ出発しようと思ってヤスを探^{さが}しましたが、どこへいつてしまったのか見つかりません。たいへん不思議^{ふしぎ}



南郷町の神社

に思^{おも}ってまわりをあちこち探^{さが}しましたが、ありませんでした。夜中だったのでどうしようもなく、そのままにして川に行きました。

帰りは昼になっていたので、ヤスをなくしたあたりを注意深くさがしてみると、あるとき休んだ場所から、二、三枚くらいはなれた田の中にヤスが投げこまれていたとか聞きます。



ヤス

二三、成田弥左衛門の父が吸坂村で不思議なことにであう

なりたやざえもん
成田弥左衛門のお父さんと清右衛門さんという人が、ある夜、
※せばりよう
川で瀬張り漁^{りよう}をしているところに行^いったときのことです。

夜中になったので、さて帰ろうとしていると、その場所にいた
他の漁師^{りようし}が、

「今帰るのはやめたほうがいいですよ、この小屋で朝になるのを
待^{まち}ったらどうですか。」

と言^いいます。しかし、清右衛門は、

「いやいや、明日の朝に大事な用事があるのでどうしても帰らな
いといけないのです。」

と言^いって帰りました。

そして、吸坂^{すいさか}の村を越^こえて刑場^{けいじょう}があるところを通りかかったと
きに、前^{まへ}の方^{ほう}の地藏堂^{じぞうどう}が何でもないので音がしてゆれ動き、その
屋根^{やね}がひっくり返りそうに見えましたが、清右衛門は、これは良く
ないことだと思^{おも}って近寄^{きよ}ってみましたが、お堂はゆれておらず、
何もおかしいところはありませんでした。

あれは何だったのかわからないということでした。



片田の瀬張り 『錦城名所』より

※『瀬張り』…川の浅瀬を横切るように竹を一行に並べて打ち込み、網を張りわたしてアユを通れなくし、上流から来たアユをおどして集め投網でとる漁。大聖寺藩では動橋川や大聖寺川、三谷川などで藩が漁師から税をとって許可した。『錦城名所』では、大聖寺川の「片田と豆田間の瀬張り」が描かれている。豆田は黒瀬村と上河崎村の間にあり、絵のように大きな岩が吸坂の山と大聖寺川の間にあった。

二四、瓜生伝の乳母の夫があやしいことにあう

あるとき、うりゅうつとむ 瓜生伝の乳母の夫が、森本弥左衛門の家にお祝いごとがあり、お祝いの料理を方々へ配る手伝いをたのまれました。

その夜八時ごろでしょうか、※さぶりぎひょうえん 佐分儀兵衛の屋敷へ、乳母の夫が料理を持って行ったときのことです。

このさま 殿様の御屋敷の外にある馬場のあたりまでくると、何となくぼんやりしてきて、いつのまにか御堀の中おほりに落ちて立っていました。その水に落ちた音を聞きつけ、御門ごもんを守っていた人が出てきて、なんとか乳母の夫を引き上げました。しかし不思議なことに、持っていた料理の品々はちっともひっくり返ったり、こぼれたりせず、きちんと入っていました。普通なら、御堀ふつうの中に落ちたら手に持っていた物はひっくりかえるはずなのに、何ともなかったのはどうしてだろうか、そのころ人々はよく言っていたということです。

※『佐分儀兵衛』…初め佐分利と書いた。初代は初代加賀藩主利家に三〇〇石で召し抱えられ、二代加賀藩主利長のとき大聖寺城の山口玄蕃を攻めて戦死。子は利明が二代大聖寺藩主になるとき金沢から家老としてきた。以後、家老を務める家として代々、儀兵衛を名のり千石を受けた。

二五、土山金吾があやしい火を見る

つちやまきんご　のぐちせいさい　よばなし
土山金吾があるとき野口清斎の家に夜話をしにいかうとでかけたときのことです。

おやしき　このやまは
御屋敷の外にある馬場の角あたりを通りかかると、殿様の御屋敷が火事になっているようすが見えました。ちょうど作事所《藩の工事などを指導する役所》があるあたりからの火で、水門の上に炎の先がのびて見えます。

金吾はとてもびっくりして走って家に帰ると、火消しの服装に着替えてまたその場所まで戻っていきました。その途中、前から人がやってきて、



「どうして火消しのかっこうをしているのか。」
不思議そうに聞いてきたので、それまでの事情を話し、

「ここから火事になっているのが見えたのだ。」

と言って、さっき火が見えたところまで戻っていつてみたのですが、火が見えません。御屋敷の中も静かで何の音もしませんでした。

（しかし、おかしいこともあるものだ。）

と思い、その夜は清斎の家に行くのをやめて帰ることにしました。次の日、清斎の家に行って昨夜のできごとを話しました。清斎も、

「昨夜は、新橋の下屋敷の方で火事の火が見えたので大騒ぎして、家の者を手伝いに行かせたが、そのあたりに火事なんか少しもなかった。」

と言います。その後、お互いに

「不思議なこともあるものだ。」

と語り合いました。

むかし、清斎の家では、新橋のあたりで起きた火事が居間の障子にうつって見えたということです。

二六、瓜生伝、坂で化かされた人を見る

うりゅうつとむ しんごろう
瓜生伝が新五郎という者と、「鳥打坂」というカモをつかまえる場所へ、朝のカモとりに行きました。前川清左衛門や大野兵右衛門もまた、「堤の上」という土手の上でカモをつかまえようとしていました。

やがて夜が明け、カモも池に戻り、カモとりができなくなったので、伝と新五郎は家に帰ろうとしました。すると、向こうの方から清左衛門の大きな叫び声がかかります。

「そちらへ行く人がいますが、何かにばかされているようだ。道を教えてやってください。」

それでよく見みると、人が歩いてきます。その人は、奥谷村に住む者で、殿様の行列で長い槍を持つ役目の身分の低い者でした。伝もいつもよく見て知っている者でしたから声をかけて、

「どこへ行くのだ。」

と聞くと、その男は答えることもせず通り過ぎていきます。もう一度呼びかけましたがやはり答えませんでした。

その男の行く先に、奥谷村と熊坂村との分かれ道があります。槍持ちの者はその分かれ道で、奥谷の方には行かずに熊坂の方へ

行きます。

かわいそうに、と思って何度も大きな声で叫びました。

「道をまちがっているぞ。」

しかし、ついに聞いてもらえずにそのまま行ってしまったのです。やがて、清左衛門と兵右衛門の二人が来たので、どのようなようすだったか聞いてみました。すると二人がこのように言いました。

「夜明けから向こうの山に人の姿が見え、山へ行くとも畑へ行くともなく歩いてくるので、これはきつとキツネにでもだまされたのだろうと思って話を聞きました。あの男は、夜の六時すぎに大聖寺の町を出て、奥谷村へ帰るのだと答えました。そこで、今まで何の用があつてどこにいたのか、と聞いたのですが、聞いている間にふっと通り過ぎて行つたのです。きつとまだ、キツネにだまされているのでしょう。かわいそうなことです。」

そのようなことを話しているうちに、あの男はもうどこへ行つたか分からなくなっていました。そののち、あの男を見かけたことはありますが、何も変わったようすはなかったといひます。

二七、岩原武左衛門、山姥に会う

いわはらたけざえもん

岩原武左衛門の祖父も武左衛門といいます。その祖父が北浜のあたりに用事があって行ったときのことです。

家来を先に帰して、自分は大きな道すなみちを通って菅波村すがなみむらへ行こうとしました。その道の途中、山田村という所を通ったときに小さな川が見えました。小川には橋がかかっていたのでその橋を渡っていくと、その川で洗濯せんたくをしている人がいます。

なんとなくその人を見ると、姿は年をとった女の人のようですが、顔は口には出せないほどおそろしい顔をしていました。額ひたいも大きくて長かったといひます。これは化け物ばものにちがいません。



山田町

いと思い、その場所を早足で通り過ぎました。

さっきの場所が見えないところまで急いで行くと、急に空が曇りだして大雨が降ってきました。武左衛門は大変困って、ますます早足になりながら、街道かいどうへぬけ出ていきました。街道へ出るとそのまま雨は晴れたので、すぐに菅波村へ行って用事をすませて帰りました。

家には家来も帰っていたので、

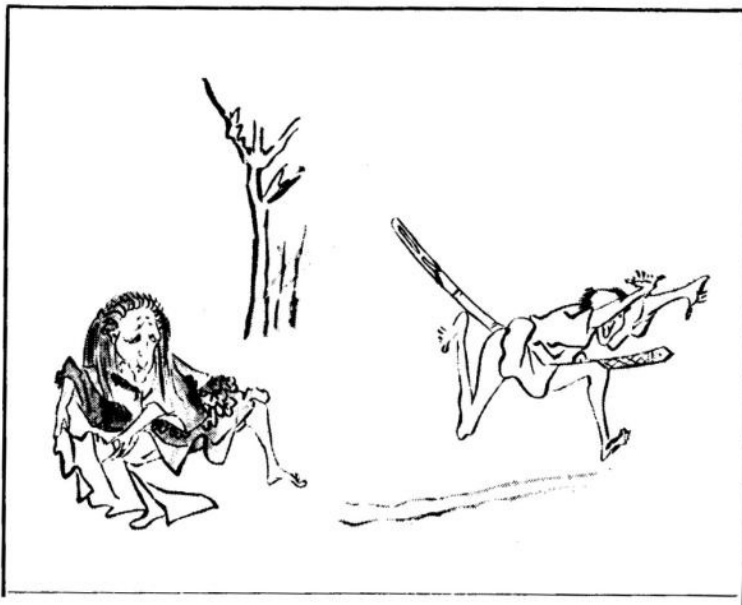
「さっきのにわか雨には困ったなあ。

急に大雨が降ってくるから雨具もなくて本当に困ったよ。」

と言ったのですが、

家来は、

「それは、何のことを言っているの



『大聖寺藩史談』『聖城怪談録』より

すか。今日はずっと晴れていて、雨なんか降りませんでしたよ。」
と言います。武左衛門はおどろいて、

「これはあの化け物のせいだろう。あれはきっと山姥※やまんばにちがいない。」

と起こったできごとを家来と話し合っていました。

この話は三年間、他の誰にも語らなかったといいます。

「話せば山姥がやってくるような気がして話せなかった。」

と、のちに御屋敷おやしきで初めて山本太郎左衛門やまもと たらう ざえもんに話したということです。

※『山姥』…山に住む大女で、目は鋭く、耳まで裂けた口と長い髪を振り乱していると言うのが大方のイメージで、自分のところに迷い込んだ人を取って食べようとする鬼女きじょの姿が多い。しかし、一方では山姥は美しい女性であったり、里の人間と交流し、親切な善人に対して、福をもたらすという話も多くある。

二八、浦上治部蔵、人を傷つけようとした

浦上嘉門うらかみ かもんのひいおじいさんで治部蔵じぶぞうという人が、あるとき度胸どきょうだめしで細坪村ほそひらというところへ出かけで行きました。村には「うす池」とよばれる所がありましたが、そこは火葬場かそうばだったのです。

その場所に行くと、何者かが火葬場のあたりに座っていました。



細坪町

その姿がたいへんあやしくみえたので、これは人ではないと思い、連れていた犬におそわせてみましたが、犬はおそいかかることができません。それでよけいにあやしく思い、自分のやりでついてやろうと思って進みました。けれどももしも人間だったら、まちがって殺してはいけないと考え、問いかけてました。

「何者だ。」

「私は人間です。あわて

てまちがえないでください。」

と相手が答えたので、治部蔵がよく見てみると人間の女の人でし

た。

それで治部蔵は不思議に思ってたずねてみました。

「あなたは女なのに、このようなこわい場所でいったい何をしているのですか。」

それに答えて女は言いました。

「私の夫が病気で困っており、その病気は、人を焼いた火でモチを焼いて食べさせると治ると言い伝えられているので、そのとおり、ここに来てモチを焼いているのです。」

治部蔵はたいへんおどろき、

「何とまあ、あぶないところであった。声をかけなかったら、あなたを殺すところでした。夫の病気を治すためというのは感心なことだが、これからはそのようなことをしないように。」

と言いきかせて帰ったといいます。

そして、二度とそのようなことが無いようにと思った治部蔵は、その後、夜に度胸だめしに出歩くことをやめ、子孫にもやめるよう言い残したとか聞きます。

この話は、治部蔵の孫の吉田甚助よしだじんすけから聞いたものです。

二九、吉崎屋甚左衛門の家来、オオカミにあう

よしざきやじんざえもん

吉崎屋甚左衛門という町人は、昔から酒をつくって売っていました。その二代前の甚左衛門のときのことです。

甚左衛門は、冬の間

はいつも、海辺に住む

男をやとって、酒を作

るための水をくませる

ことに決めていました。

あるとき、その水く

みの男は一〇時ごろか

ら休みをもらって山代

温泉へ行きました。そ

こで温泉に入って、真

夜中ごろに帰りました

が、御敷※1 おやぶのあたりに来

ると道の両わきに大き

いオオカミが二匹もう

ずくまっていました。



山代温泉 総湯付近

その間を通らないと帰ることができないので、しかたなくタバコに火をつけて、キセルを口にくわえて吸いながら通り過ぎました。そのとき、二匹のオオカミは何もせず男を通しましたが、男の前と後ろをはさんで送るようにしてきました。

男は非常にこわくて、やっと吸坂村について休んでいると、その間にオオカミもどこかへ行行って見えなくなっていました。

（何とおそろしいことに出会ったものだ。どこかへオオカミは行ったが、今のうちに帰らなければ。）

と思って、急いで出発しました。

刑場の近くに行くと、向こうから何か頭に火をのせた人間がやってきます。

「これはいったい何だ。」

とおどろきながらも、よく見ると、頭の上で火をともし、頭の髪の毛を口にくわえて頭に鏡をつけています。そのようすを見ると、言いようのないおそろしいものでした。

男は生きた心地がせずに通り過ぎて行きました。通り過ぎてから、またこわくてふり返って見ると、その者は吸坂のお堂に入っていたようでした。

これはきつと、夜中の二時ごろに人を呪い殺そうと行う「丑の刻参り」というものにちがいありません。

その夜は、いろいろ多くのおそろしいことであつたと話しました。



※1 『御藪』…二代藩主利明が寛文五（一六六五）年山代村に竹を植えさせたものという。江戸後期には、見定寺、山王、立石とよぶ上藪と、煙硝、竜宮院とよぶ下藪があった。立石・煙硝・竜宮院御藪には、番卒二人が一〇年代で置かれていた。大堰宮橋付近にあったという立石御藪というと、南北に約二七〇m、東西五八mの広さと『藩国見聞録』にある。村人は竹や竹

の子を取ってはならず、取れば罰があたえられた。

※2『丑の刻参り』：午前二時から二時半ごろにかけた時間帯に神仏に参拝し、呪う相手の形代となる人形を神木に打ちつけ、呪詛する。行う者は、白装束で鏡を胸にかけ、一本足の高ゲタを履き、頭には金輪をかぶり、その上の三本のろうそくに火をつけて手にかなづちをもって五寸釘をうつ。

三〇、逢坂清右衛門が火の玉にあう

逢坂清右衛門という足軽がいました。永町でお祭りがあつた夜、永町の近くに知人がいたのでたずねてきました。

夜中になったので帰ろうと、紺屋治右衛門の家から提灯を借りて帰ったのですが、弓町の途中でその提灯の火が消えてしまいました。そして、荒町の木戸《町の中の警戒のために要所に設けた門》のあたりを通りかかると、二軒先の鉄砲町の入り口の方に火の玉が見えます。清右衛門は、

（いつも十一町に火の玉が出て、飛んで行くというのはあの火の玉のことか。）

と思いました。

そして鉄砲町まで進んでいくと、その火が後からついて来るので清右衛門は不思議に思い、近くの杉の垣根の間にかくれて、よ

うすをうかがうことにしました。すると、目の前をあの火の玉が通り過ぎて行きます。その火の玉をよく見ると、火の中に腰より下がない男と女の人が見えしました。清右衛門が思わずびっくりして声をあげて前へ飛び出すと、火の玉はパツと元の火があった鉄砲町のはじの場所に戻り、動かなくなつたということでした。

これは瓜生玄栄が清右衛門から聞いた話だということです。



三一、清右衛門、荻生村あたりでキツネがつくのを見る

逢坂清右衛門が、あるとき荻生村へ用事があり行ったときのことです。その途中、田を耕している男が何だか大声をあげています。どうしたのかたずねてみると、その男は

「またいつものキツネが、今、私の体の中に入って休んでいるのです。だれか来てください。」

と言うのです。

近寄って見ると、男が腕の下からキツネの足を引っ張り出して手に持っていました。そのうちにキツネの足をはなしてしま

い、
「ああ、にくたらしいやつだ。あれを見てください。向こうの山へキツネが逃げて行きました。」

と言います。

そう言われて、向こうの山の方を見ると、稲山の森へキツネが一匹飛んでいくのを、清右衛門は目の前ではつきりと見たのです。



荻生町

このことは、瓜生玄栄が東方屯へ話したといひます。

※『東方屯』…本国は越後。

初代が三代加賀藩主利

常につねに仕え、大坂の陣で

活躍。屯は五代目で五代大聖寺藩主利道から仕えはじめ、寛政二（二七九〇）

年八代藩主利考には御近習頭と表御用人を兼ねて仕え、一二〇石を受ける。

通称が屯（ここでは、「どん」と読んでみた。）、儒学者として祖山を号した。子の蒙齋、孫の芝山も学者として有名。

た。子の蒙齋、孫の芝山も学者として有名。



三二、殿様のお住まいで、「はう子人形」が歩く

昔、吉連川御簾中様が、大聖寺の御屋敷にいらつしやり、まだ

幼かったころのことです。ある夜に、「はう子人形」《ハイハイする

形の人形》で遊んでいるとその人形が突然立ち上がり、二三尺

《約九〇cm》ほど歩いてたおれました。

お仕えする女たちはとてもおどろいて、これは、物の怪が出た

のではありません、それから毎晩、見張りをしたということです。

それから後の、また夏の夜の事です。御簾中様が蚊帳の中か

ら外を見ると、蚊帳の近くの行灯が二、三寸《約六〇九cm》上へ
浮きあがったとかいうことです。これもとても不思議なことでした。その後は何の変わりも無かったということです。そのときは、
お局の岩瀬という人もいて、いっしょに見たということです。

※1 『喜連川御簾中』：五代藩主、前田利道の娘・崎姫のこと。大聖寺藩史によ
ると、安永七年（一七七八）に下野（現在の栃木県）の喜連川藩の七代藩主・
喜連川恵氏へ嫁いだとある。しかし、翌年二四歳の若さで亡くなっている。
「御簾中」とは正室を意味する言葉である。

※2 『御屋敷』：原文に崎姫が遊んでいた所は御広式とあった。御広式は御屋敷
の中でも藩主の奥様が住む所をいう。奥様方に仕える多くの女たちがいた。
年寄りという女は位が高く、御局という自分の部屋をあたえられた。その下
に衣食の世話をする多くの御女中や下女がいた。

三三、田丸兵庫の家、「はう子人形」のあやしさ

田丸式部の二代前に兵庫という人がいました。ある夜のこと、
娘のおもちの「はう子人形」が歩き、幼い娘はよろこんで笑
っていました。家族は、娘が部屋で一人で笑っているの不思議に
思っ、すぐに行ってみると、人形が歩いていました。人形は、
九尺《約二、七m》ぐらい歩くとたおれました。家族はひどくお

どろき、お祈りやまじないをしたとかいいます。



はう子人形

そののち、イロリの灰に人形の足跡がついていました。それから
毎晩人形の足跡があるので、えらいお坊様にお願ひしておはら
いをしてもらいましたが、足跡はやまずに続いてありました。そ
の後、人形は屋根の上へのぼっていたといひます。

おはらいをしても効果が無くどうしようもないので、その人形
を神明宮へ引き取っていただくと、その後はあやしいこともなく
なりました。

隣の家は寺西善左衛門で、善左衛門はくわしく知っていて話し

ていたといいます。

三四、瓜生伝、鹿島で大蛇を見る

瓜生伝のお父さんの清左衛門さんがまだ生きていたころの話です。

ある日、瓜生親子と寺西木工という人が、三人で鹿島へ狩猟にでかけていきました。鹿島の頂上にお寺があり、その後方に船着場がありました。

そこへ清左衛門が用をたしにいったのですが、船着場のはば三尺《約九〇cm》くらいのところに両手でかかえるくらいの太さの丸太がありました。その丸太がスラスラと動き出していくので、清左衛門はおどろいて、息子の伝と木工を呼び、三人であやしく思いながらその光景を見ていましたが、そのうちに丸太のようなものはどこへ行ったか見えなくなっていました。

これは世の中でいう、うわばみ《大蛇》というものにちがいません。

船着場の向こうには葦の原っぱがあり、このときその葦原がザーと鳴ったように聞こえたといいます。

そして、そのことを鹿島の寺の住職に話すと、その住職が話すには、

「その話に思い当たることがあります。いつも秋の初めに、弱って飛べないカモがこの葦原に来るころ、風がない夜にも時々強い風が吹いているかのようにザーザーと音がすることがあるのです。今思えば、これは葦原のカモをそのうわばみ《大蛇》が取って食べているのでしょう。」

ということでした。

それから、鹿島には「はに松」という古く大きい松の木がありました。その松の木の上に長さ三間ばかり《約五、四m》のへびのぬけがらが、枝に垂れ下がるようにあったといいます。住職の話では、九尺《約二、七m》くらいのへびはたまに見かけるということでした。



鹿島の森

三五、勾坂こうさかという人、蛇がウサギをのみ込むのを見る
あしがら
 勾坂作右衛門という足軽の息子が、熊坂

山というところへ、キノコ狩りに行っ

たとき、三尺《約九〇cm》ぐらいの

ヘビがウサギをのみ込むのを見たそ
 うです。

本当に三尺ぐらいの小さく細いへ

ビでしたが、大きく口をさき広げて

ウサギをのみ込むそのようすは、た

とえるものが無いぐらいのこわさだ

ったといえます。



三六、嶋屋喜兵衛、石堂山にて化け物とたたかう

中町に嶋屋喜兵衛しまやきへえという人が住んでいました。

あるとき、越前えちぜん《現在の福井県》へ商売をしに行ったのですが

帰りがおそくなってしまい、細呂木ほそろぎという所まで来ると日が暮れ

てしまいました。少し後ろから、みの笠がさを身に着けた人がついて

来るのでふり返り、

「どなたですか？」



と、思、つ、て、そ、の、ま、ま、※せきしよ関所のほうへ急いで行つたのですが、関所はもう閉ま、つ、て、い、ま、し、た、。

しかたなく、石堂山いしどうさんという関所の隣となりの山を越えて帰ろうとしたのですが、山の下り道くだでその後からついてくる者が喜兵衛に飛びか、つ、て、き、ま、し、た、。喜兵衛も用心して、い、た、の、で、

「さあ、こい。」

とかまえて取っ組み合、う、と、喜兵衛の力のほうが強、か、つ、た、の、で、押さえつけてつかまえようとしましたが、また起き上がりおそい、か、つ、て、き、ま、す、。二、三、回、取、っ、組、み、合、い、す、る、う、ち、に、取、り、逃、が、し、て、し、ま、い、ど、こ、へ、行、つ、た、の、か、見、失、つ、て、し、ま、い、ま、し、た、。

それから喜兵衛が自分の家に帰、つ、た、と、き、に、家、の、者、が、見、た、彼、の、

と、た、ず、ね、た、の、で、す、が、返、事、が、な、く、その、ま、ま、後、ろ、に、つ、い、て、来、ま、す、。あ、や、し、い、者、だ、

姿は、着、て、い、た、短、い、木、綿もめんの、カ、ッ、パ、が、ず、た、ず、た、に、引、き、さ、か、れ、て、い、ま、し、た、が、体、に、は、傷、は、つ、い、て、な、い、と、い、う、も、の、で、し、た、。

それから喜兵衛は、持、つ、て、い、た、提、灯ちようちんと、お、金、を、い、れ、て、い、た、袋ふくろを、あ、の、場、所、へ、落、と、し、て、き、て、し、ま、つ、た、た、め、その、二、つ、を、ま、た、取、り、に、戻、つ、た、の、で、す、が、その、と、き、は、何、も、出、て、き、ま、せ、ん、で、し、た、。

瓜生玄栄うりめうげんえいの元の家は町人の住む所にあり、しかも喜兵衛の家の隣となりだったので、その話を詳しく聞いたということです。



旧関所の門（宗寿寺）



大聖寺関所 『錦城名所』より

※『関所』…大聖寺の城下を通る通行人を検査する場所で、今の^{せきぎまち}大聖寺関町のところにあった。日の出と共に開門して日没と共に閉じて、夜は絶対に通行を許さなかった。また関所を通行するときには菩提寺から発行された通行手形がなければならなかった。

三七、山場藤八、夜中に化け物とたたかう

季節は夏の夜のこと。山場^{やまば}藤八という武士が、蚊^かにさされないよう蚊帳^{かや}をつつて寝^ねていました。その夜はたえられないほどの暑さだったので、障子戸^{しょうじど}を開けていました。

夜中ぐらいでしようか、ふと目が覚めると屋根の先の上から何者かが家の中をのぞいています。藤八はこわいもの知らずの男でしたので、

「これは化け物^{ばもの}にちがいない。こちらから見ていると来ないだろう。見ないふりをしておびき寄せ、やつつけてやろう。」

と思い、わざと背中を向けて寝たふりをしていました。

そうしていると、その化け物はソロリソロリと下へ降りてきて、カヤの近くに来て言いました。

「そこへ行こうか。」

「おお、来い。」

藤八はムツクリと起きると同時に、たがいにとびつき、上になったり下になったりと、取っ組み合っていました。藤八はついにその化け物を押さえつけました。そして、脇差^{わきざし}《短い刀》をぬいてさしつらぬくと、化け物から血がたくさん流れました。脇差

でしっかりと、畳^{たたみ}までさし通しておいて、台所へ行って明りをつけました。

藤八のお父さんはそのころまだ生きていたので、藤八のたたかう音を聞いて、おどろいて起きてくると「何事か」、とたずねました。藤八があつたことを話すと、お父さんとてもおどろいていましたが、

「よくぞ、しとめたな。」

と言い、たたかった場所へいっしょに行ってみました。

なんと、そこには何もいません。ただ、藤八が着ていた布団を寄せ集めて、脇差でさし通してあるだけでした。彼の脇差は畳をつき通して床板までささっていたといいます。



こだまにぞう
児玉仁蔵の家^{やしき}のうしろに藤八の屋敷があつたので、仁蔵のおじ

いさんの仁右衛門がこのことをよく知っていて話していたといいます。

《同じような話が『大聖寺の伝説と民話・第四集』にあります。》

三八、菩提村^{むら}の肝煎^{きまじり}が那谷^{なたむら}の辺りで化け物にあう

菩提村^{ぼだいむら}の肝煎^{きまじり}があるとき、那谷村^{なたむら}へ行こうと「越前^{えちぜん}の坂」という所を通ったときのことです。

夏ごろのことで、ちょうど昼食すぎだったので皆お昼休みをしていて人通りもありませんでした。その坂を通りかかったときに前の方にもものすごく大きな男の人が立っていました。そのようすからして人間には思えません。肝煎^{きまじり}は、度胸^{どきょう}のある人だったので気にせず坂を通りぬけようと思いました。するとその大男が、

「お前は、何かあるとここを通るにくたらしいヤツだ。今日は許^{ゆる}してやるが、またここを通るようなら痛い目にあわせてやるぞ。」
と言ってきましたが、かまわずに通りました。

またしばらく歩いて行くと、今度は美しい服を着たとても見慣れない感じの小さな男が立っています。今回もさっきと同じよう



菩提町

に、知らん顔で通り過ぎようと思いまし

たが、その小さい男はツツ、と近寄ってきて、いきなりおそ

いかかってきました。肝煎も、やってやろうとばかりにおたがい取っ組み合うと、

その化け物ばものを田んぼに投げ込みました。

しかし、その化け物は投げこまれながら

ないほどひどく痛み、それは二、三か月も治らなかったというこ
とでした。

その当時、郡奉行に早坂十郎右衛門という人がいました。その人が仕事で村々を回っていたときに菩提村にも行ったのですが、肝煎が出てこず、なぜ出てこないのかたずねると、その化け物ばものの
できごとを話したといいます。

十郎右衛門があとで人に話したのを東方屯ひがしかたじん《祖山そざん》も聞いたと
いうことです。

三九、土山十郎左衛門が女の生霊になやまされる

つちやまさこん じゅうろうざえもん
土山左近のおじいさんに十郎左衛門という人がいました。その
おじいさんが江戸で殿様に仕えていたころ、とつぜん病気がち
になり、ずっとなやんでいました。その病気が異常なことには、
窓のすきまから暖かい風が来るなあとと思うと病気になってしまう
のでした。

「これは、何か化け物ばもののしわざなのかもしれないから、お祓はらいで
もしてもらったほうがいい。」
と周りの人もすすめました。

も、

「お前は、おれを投げ飛ばしたが、そのときにお前の尻しりを切って
やったぞ、思い知ったか。」

と言いました。そんな事も聞いたか聞かないかのうちに肝煎は逃
げ帰っていきました。ようやく家に帰ったのですが、お尻が歩け

同じころに、十郎左衛門は高沢藤十郎たかざわとうじゅうろうという人と仕事をしてい

ました。彼は心陰流しんかげりゅうという剣術のつかい手だったので、彼にたのんで剣術の修行をつけてもらおうと、それからだんだんと病気も良くなっていって

いいます。

これは、そのころに十郎左衛門がある女の恨みうらを受けていたので、その女の生霊いきりょうのしわざではないかと周りの人々は言うていたそうです。



四〇．草鹿蒨が乳母のユウレイにあう

草鹿貢くさかみつぐのお父さんは蒨※しとみといいます。その蒨の乳母うばだった人とはとても長く彼のめんどろをみていました。蒨を他の何よりも愛していたのです。しかし年を取ってから病気になり、蒨の家にもた

ずねて来れなくなりました。

乳母は、一日中彼の心配をしながら寝込んでいました。蒨もひまを見ては乳母の見舞いみまにいき、一生懸命看病いっしょうけんめいかんびょうしていましたが、乳母の病気は日に日に悪くなり、今ではもう、いつ亡くなくなってもおかしくない状態になってしまいました。

ある夜、蒨が夜話よばなしに出かけて夜中に帰って寝ねていると、行灯あんどんの影が人の形をしてさまよっているように見えます。おどろいてよく見てみると乳母の姿でした。



行灯（北前船の里資料館）

（乳母は、病気で起き上がることもできない体だというのにどうしたことか。）

と問いかけようとすると、そのまま姿は消えてしまいました。少しして、蒨のお母さんが別の部屋で寝ていましたが、蒨を呼んで言いました。

「今夜は、寝ようとすると、誰かが耳元で話しているような気がしてなかなか寝付けない。これはどうしたことだろうか。」

「自分も今こういうことがありました。」

と、部もさつき起きたできごとを話し合いました。

そんなとき、玄関げんかんをたたく音がして、乳母の家の者が、乳母が今しがた亡くなったことを伝えにきました。

（これは、私のことをなつかしく思い、乳母の魂たましいが家にやってきたのだろう。）

と部はますますかわいそうに思ったのでした。

これは草鹿玄恭くさか げんきょうの物語です。

※『草鹿部』…本国は伊勢いせ。正保五しょうほうご（一六四八）年、初代藩主利治としはるに医師としてつかえた草鹿玄立くさか げんちゅうの子玄仲げんちゅうの二男として分家。父の玄仲は漢学者として有名。五代藩主利道に仕え五人扶持ふちを受ける。藩主の御近習ごきんじゅうとなり、米二五表にんむ じゅうりまいを任務中合力米として受ける。草鹿蓮溪くさかれんけいらの学者は本家の人々である。

四一、越前屋善三郎の妻、ユウレイになる

越前屋善三郎えちぜんやぜんざぶろうという町人がいました。その町人の貸家かしやが裏通りにあり、そこに小さな商売をしている人が住んでいました。その

人は妻つまと二人きりで貧しい暮らしをしていました。

ある日のこと、その商人が品物を売り歩きに出かけ、妻が一人きりで家の留守番るすをしていました。

日もようやく暮れるころに、家の外で入り口の戸をコンコンと小さくたたく者がいます。「誰でしょう。」と、妻が立って行きながら聞くと、女の声で、

「ちよつとここへ出てきてください。」

と言います。その声はたしかに聞いたことがあるものでした。それは三年前に死んだ家主やぬしさんの奥さんにまちがいなかったのです。それで妻は、きっとキツネかタヌキのしわざであろうと疑うたがって、すぐには出ませんでした。すると相手は夫の名前を呼んで、

「会いたいです、ここへ出てきてください。」

と言います。妻は夫がいないと答えると、

「それなら明日の夜、また今ぐらいの時刻じこくに來ます。よそへ行かないで、必ず家にいてくださるように伝えてください。必ず伝えてくださいよ。もしも、そうしてくださらなければ絶対に恨みうらますよ。」

とこまごまと言が残して、相手の姿はどこかへ行ってしまったの

です。



妻はひどくおそろしくなって、思わず「あっ」と言って気を失って、たおれてしまいました。

まもなく夫が帰って妻を見ると、死んだようにたおれているのでおどろいて、すぐに気を取りもどすよう酒を少し飲ませて介抱かいほうしました。それでようやく妻は元気を取りもどし、先ほどのできごとを夫に話しました。

夫は、話し始めのころは本当のこととは思えませんでした、が、

さらに話を聞いて放ってはおけないと思い、

「その女に何か事情があるのだろう。だが、明日もまた売り歩きに出るので帰りもおそくなるだろうし、どうしたらよいものか。」

と言うと、

「いや、明日はぜったいに出かけないでください。もしも家にいなければ、どのような目にあうかわかりません。」

と何度も出かけないように妻が強く止めたので、夫はしかたなく次の日は売りに出かせませんでした。

翌日、もう日が暮れてきて夕暮れの鐘かねの音がさみしく聞こえる

とき、二人が心配したとおり、誰かが入り口の戸をたたきます。

「ほらっ、あの女が来たっ。」

と妻は布団をかぶって身を伏ふせてしまいます。戸の外から夫を呼ぶので、夫は戸を開けて出てみると、そこには、妻が言っていたとおり、三年前に死んだ家主さんの奥さんが立っていました。

「あなたは どうして迷って来たのですか。」

と、夫がおどろいて聞くと、

「いえまあ、思い残すことがありまして、まだ、あの世に行けず

にさまよっています。つきましてはおたのみしたいことがあります。家主の入口にまじないのお札が貼^はつてあります。これを取り外してください。こ

のようにお願いしたのに、断^{つた}るとおっしゃるならうらめますよ。」

と、おそろしそうに言います。

（これはただ事ではない。断^{つた}たら命を取られてしまう。自分の命には代えられない。）

と夫は考えて願いをきくことにし、女を帰しました。夫は家の中に入って、死んだようになっている妻にまた薬などを飲ませて、ようやく気持ちを落ち着



けさせることができました。そして夫が先ほどのようすを妻に話しますと、

「どうでもいいからその札^{ふだ}を早く取ってきてください。おそくなったら、またきつと来ますよ。早く、早く。」

と妻はおそれて声をふるわせながら言います。

それで夫は、他にどうしようもなく家主さんの家の入口に行き、貼^はつてあった札をそつとはぎ取りました。すると、家主さんの家の中がひどい騒^{さわ}ぎになり、「薬だ。」「水を持って来い。」などと聞こえました。

夫はすぐに家主さんの家の中に入っていき、どうしたのか尋^{たず}ねました。

「たった今、家主さんの奥さんが何もしないのに死んだのです。医者を呼んでください。」

そう言われて、夫はすぐに近くの医者を連れてくると、医者は奥^みさんを診^みると、

「これは不気味な病気です。とにかく急に死んでしまったので治療^{ちりょう}の方法がありません。」

と言ったのですが、家主さんは無理に薬をもらい、奥さんに飲ま

せようとなりました。でも薬は効がなく、ついに死んでしまいました。

今死んだこの奥さんについては次のような事情がありました。

先の奥さんが病気で死ぬときに幼い子供がいたので、家主に、「私が死んだら、この子が成人するまでは絶対に新しい奥さんをむかえないください。この子を継母に世話してもらうのは、とてもかわいそうなのです。必ず私の言うことを守ってくださいね。」

と、こまかく言い残していったのです。

しかし、家主はひとり者で下女も下男もないので、妻を迎えなければ家の生活が成り立ちませんでした。それで三年もたったので新しい奥さんをむかえたという事情でした。

（まじないの札をはぎ取るとは、何とおそろしいことをしてしまったんだ。きっと、あのユウレイが新しい奥さんを殺したのだろう。このことが他の人に知られたら、自分もユウレイといっしょに人を殺したと思われるにちがいない。）

夫はそう思い、深く心に秘めてだれにもユウレイの話をしなかったといします。

何年か後になって、夫の友人に竹村七左衛門（たけむらしちざ えもん）という人がいましたが、この人に初めて話したと聞きます。そのころのことでしょうか、となりの越前の国《現在の福井県》にもユウレイの手伝いをしたということで、死刑にされた人があったと聞きます。

四二、大森小治兵衛が杵の化けたのを見る

大森小治兵衛のお父さんも小治兵衛といいました。そのお父さんの家の近所に土山金吾という人が住んでいて、碁（ご）をいっしょに楽しむ親しい友だちでした。あるとき、小治兵衛の家へ金吾が碁をうとうと遊びにきていましたが、日が暮れるのも気がつかないまま夢中になってうっていました。日が暮れたころ、入り口にかかった、のれんの下から誰かが顔を出しています。

「何者だね。」

と聞いてみましたが返事がありません。そこでよく見てみると米をつく杵（きね）でした。これは不思議と二人がすぐに出ていってみると、その杵は頭に手ぬぐいを巻いて、入り口のかかりはなれたと



杵と臼（もちつき用）

ころでたおれていました。

二人はおどろいて不思議がりましたが、その後は何の変わりもありませんでした。



四三、勝木惣右衛門が夜中にあやしいことにあう

勝木七之丞の実父の惣右衛門がある夜に、耳聞山の辺りへ話をしようと思われました。家を出たのは日も暮れかけのころで、はつきりとまわりの色は見えないようなときでした。

東野十郎の屋敷にシイの木があり、その木の下を通りかかったのですが、そのとき急に目の前が真っ暗になり、後へも先へも進めなくなりました。鳥肌が立つほどおそろしくなり、刀をぬいて構えると前を切り払うように振り回しました。

そして、千助の家の前の塀にしがみつ きながら何とか先へ進み、隣の丹羽浅丞の屋敷前へ惣右衛門がたどり着いたときには、元のように道が見え、こわくなくなったということです。



藩邸 『錦城名所』より
(『聖城怪談録』の中によく出てくる「馬場」が左に土居で囲われてみえる)

聖城怪談録下

一、田辺多門、夜中にあやしいことにあう

ある夜に、田辺多門たなべたもんという人が、丹羽三左衛門にわさんざえもんの家へ話に行き、夜中ごろに帰りました。三左衛門やしきの家の門を出て、となりにある河地嘉右衛門かわじかうえもんという人の屋敷やしきの前を通りかかったときのことです。後ろから

「多門、多門。」

と呼ぶ声がしました。きっと三左衛門が門の中から呼びもどしているのだらうと思い、三左衛門の家の方へもどってみると、三左衛門の家にはもう門のカギがかけてありました。

そこで、多門は門をたたきながら、

「多門です。私を呼んだのは何の用があつてですか。」

とたずねました。しかし、門を開けてくれて三左衛門の家の者が答えたことには、だれも多門を呼んではないということでした。

すぐに多門は門の前へ出てみましたが、どこにも多門を呼んだ人はいなかったということです。

二、清瀬という局がコワイ目にあう

清瀬きよせの局つばねという人がいました。御屋敷おやしきで奥方様に仕えて、三日たったころの夜、部屋で休んでいました。夜中に行灯あんどんの火が消えかけてうす暗くなったころ、上の棚たなから何か黒く丸いものがおりてくるのが見えました。

（これは何と不思議なものだらう。）と思い、声も出さずにいましたが、それはまくら元までおりてくるとそのまま胸の上へ乗ったのです。それはとても重く、まるで人に押されているように苦しく、起き上がりとしても起き上がれず、しばらくの間苦しんでいました。苦しさのあまりに声を上げることができず、ただ念仏を口の中で唱えることしかできませんでした。そのうちにその黒いものはどこかへ行ってしまう、いなくなったということです。

三、島田伴蔵兄弟が不気味なことにあう

島田伴蔵しまだともぞうのお兄さんいけのしんで幾之進という人がいました。お兄さんはとても度胸のある肝きものすわった人でした。

ある日、弟の伴蔵といっしょに下川の「藤棚ふじだな」という淵ふちにナマズ釣りに出かけました。幾之進は川下で釣り、伴蔵は川上で釣ることにして、二人の間は一町《約一〇九m》ばかりはなれていた

といいます。幾之進のサオにはときどき引きがありました。ナマズは釣れませんでした。

そうしているうちに伴蔵の前で魚が飛びはねたように見えます。

よく見てみると魚ではなく、小石が川に投げられたものでした。

(誰^{だれ}が投げたのだろう。)

と、辺りを見ましたが

誰もいません。

しばらくすると、川

下から船が一艘^{そう}こち

らへ向かって来るの

が見えます。しかし伴

蔵の前を通り過ぎて

いくと、すぐにその船

は消えてしまいました

た。伴蔵はとてもおど

ろいて兄のところへ

行き、

「今、気味の悪い



下川（藩の御屋敷より大聖寺川下流）のゆるやかな流れ
三ツ町付近

ことがありまし
た。こわいから

早く帰りましよ

う。」

と言いましたが、

幾之進は少しもこ

わがることなく、

「臆病^{おくびょう}なやつだ

な、こわいといってもたいしたことじゃないだろう。」

と叱^{しか}るので、伴蔵はしかたなくさっきの場所にもどって釣りを続

けました。

ナマズは釣れず、小石が水面を打つ不気味^{ぶきみ}なことは続いたまま

なので伴蔵はまた兄のところへ行つてたのみました。

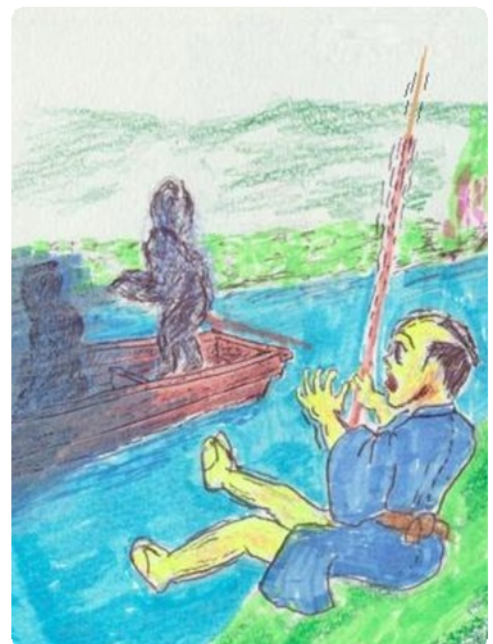
「やっぱり、帰りましよう。」

しかし、幾之進がわかってくれないので、伴蔵はまた元のところ

へもどりました。

そうしているうちに、後ろの山から馬が二、三匹走ってくるよ

うな音がしました。伴蔵がふり返って見ましたが何の姿も見えま



せん。弟はこわくて、もうがまんができなくなり持っていた釣りざおで地面を二、三〇回くらいたたきました。すると、馬の走る音がやみました。

そして伴蔵はまた兄のところへ行くと

「明日の朝は御屋敷へ行く当番の日ですね。もう夜もおそいです。お願いですから帰りましょう。」

とたのみました。そこで幾之進はようやく納得してくれて、帰ることになりました。

家に帰るときは夜の一時くらいだと思っていたのですが、もう帰ってみると、午前二時ころになっていたといひます。

幾之進兄弟はこの不気味なできごとを秘密にして、人に話さずにいました。最近になって、市橋善右衛門や福岡孫輔などに語ったということです。

四、田辺多門、あやしい音楽を聞く

ある夜のこと、田辺多門が大野才記の家へ話に行きました。そして夜おそくに帰ったときのことです。

才記の家となりにある雨夜八兵衛の家の下あたり、川にそつ



雨夜の家近くから見た現在の福田橋

た道を通りかかったとき、どこからともなく笛や太鼓の演奏が聞こえてきました。道の先には石の橋があり、橋の上から大変大きく聞こえてくるようです。そのころは近くに警備の番小屋があったので、そこへ行くと、その音楽は聞こえませんでした。番人を呼んで音楽のことを話すと、番人は

「そのような音楽を何度も聞いています。いつものことなのであやしいとも思いません。」

と答えました。

同じころ、ある者は御城山《錦城山》あたりで笛や太鼓の音を聞いたことがあったり、また、外馬場近くで聞いたことがあったりと、そのような音楽を聞いた人はたくさんいたということです。

また、年号が寛政^{かんせい}《一七八九〜一八〇一年》の頃に、大井司馬允^{※2 おおいしまのじょう}

の家で、笛や琴の演奏会があり、夜一時ごろに終わって皆が帰っていきました。その同じ夜、服部才治^{はっとりさいじ}という医者が、耳聞山^{みみきやま}あたりに病人を診に行き、夜の一二時すぎに帰ったときのことです。福田橋の上で、どこからともなく琴や笛の音がとてもやさしく聞こえてきて、思わず立ち止まって聞いていたそうです。

それで、そのことを翌日、橋のあたりの人になぞねてみましたが、どの家も三味線^{しゃみせん}や笛の演奏をしていなかったのです。司馬允の家では夜一時ごろに終わっています。そのうえ、司馬允の方から聞こえたものではなく、方角がまったく違っていたということです。

※1 『番小屋』：町の木戸^{きど}を警備^{けいび}する小屋。城下町大聖寺の要所^{ようしよ}には木戸が置かれて、木戸番^{きどばん}が見張っていた。天明六^{てんめい}（一七八六）年の絵図では福田橋の北に木戸があった。木戸は朝六時に開かれ、暮れの六時に閉じられた。

※2 『大井司馬允』：人持^{ひともち}とよばれる家老に次ぐ上級武士で五百石を受けた。人持とは、殿様の家来を自分の家来のように付けてもらえる武士で、人持と家老は大聖寺町に下屋敷^{しもやしき}を持てた。先祖は越前前田利家に仕え、砲術^{ほうじゆつ}をおさめた。利治について大聖寺に来て代々、司馬允か市兵衛を名のった。

五、島田幾之進が疫病の神にあう

疫病^{えきびよう}が流行している年のことだったといえます。

ある夜、島田幾之進^{しまだいくのしん}と竹村新蔵^{たけむらしんぞう}という人がいっしょに、畑^{はた}の清水^{しょうすず}の方へ涼みに行きました。しばらくするとその清水の方から男がやってきて二人とすれちがって行きました。すれちがいざまにその男を見るとその身長は一丈^{じょう}《約三、〇三m》あるように見えました。二人で「とても気味の悪い人だ。」と話しながら涼んで帰りました。

そしてその後すぐ、新蔵が疫病で寝込んでしまいました。また



畑町の清水

続いて幾之進も疫病にかかりました。

おがわすけいち
新蔵の弟に小川助市という人がいましたが、新蔵がその弟に、

「自分たちがなかったこの病気は治らないだろう。自分が死んだら幾之進も続いて亡くなってしまいうにちがない。」

と言うのでした。その通り、その病気は治ることなく新蔵は死んでしまいました。そして幾之進も続いて死んでしまったといいます。

どうしてこのようなことを言ったのでしょうか。その新蔵がであつた不思議なできごと話していたといえます。

病気になったのはその大男に会ったからでしょうか。とても気がかりなことです。

このことを小川助市が福岡遠へ話したということです。

六、ひろたくま蔵、不思議なものを見る

あるときに、ひろたくま蔵という者が多くの仲間といっしょに山代へ遊びに出かけ、夜おそく帰りました。

すいさかむら
吸坂村まで来たとき、そのときはちょうど満月で明るい夜でしたが、異常に明るかったので不思議に思つて空を見上げました。

すると、月のほかにもう一つ太陽

のようなものが出て赤々と光っていたので、皆は不思議に思いました。

しばらくして、その太陽のようなものはすっかり消えてなくなつたといいます。

あとで、熊蔵が殿様に御屋敷でお話し申し上げたと聞きます。

七、ときえだばんのじょう、時枝勘右衛門の家に怪人かいじんが現れる

ときえだばんのじょう
時枝伴之丞の高祖父《おじいさんのおじいさん》にあたる勘右衛門かんうという人がいました。その勘右衛門のいたところ、近所からで

えもん
た火事が燃え移り、家が焼けてしまったので、勘右衛門の弟である小塚文左衛門こづかぶんざえもんという人の家に、いっしょに住まわせてもらつて



吸坂町

いました。

やがて文左衛門は病氣になって死んでしまいました。

その後、文左衛門の家の風呂場に、旅人と思われる見知らぬ人が、旅する着物姿のまま入っていきました。（何者なのか。）と風呂場を見ても人の姿はありません。家の中をすみずみまで探しましたが誰もいなかったといひます。

そのあと、勘右衛門も家を新しく建ててそこへ移りましたが、やがてお母さんが病氣で死んでしまいました。

このお母さんの部屋から、勘右衛門の部屋に通じる廊下ろうかがありました。

あるとき、勘右衛門の部屋の前を通って廊下の方へ行く者がいました。勘右衛門は誰だだれろうかと思って見ると、青い綿入れわたいの着物を着た見知らぬ人が、死んだお母さんの部屋へ行くのが見えました。その部屋は、お母さんが死んだあと誰も使っていないのです。

すぐに家来を呼んで、お母さんの部屋を調べさせたのですが誰もいません。そのころ勘右衛門は病氣で立てなかったので、家中すべてを家来に調べさせましたが、変わったようすは少しもな

かったのです。

このできごとは福岡丹藏ふくおかたんとぞうが伝え聞いて、殿様にお話したといひます。

八、高木与右衛門《与三右衛門》が山姥やまんばの糸を拾う

高木たかぎ与三右衛門よそへもんという人が、あるとき縄なわでカモを取ろうと細坪ほそつば村へ行つたとき、田んぼのあぜ道に美しい糸が落ちていました。

与三右衛門はその糸を拾い、糸が伸びている方へ、どんどんたぐって行きました。そのようすを後ろから家来が見ていると、主人がなんだか宙を歩いているように見えます。家来はおどろいて後ろから何度も与三右衛門を呼びました。すると、与三右衛門は我に返って、

「あまりに美しい糸だったので、思いがけず拾いながらいつてしまつた。」

と言うと、家来は、

「後ろから見えていましたら、空を飛んで歩いているようでした。

これはなんだか氣味が悪いです。早く帰りましょう。」

と言ひます。そこでその糸を持っていたところで切つたのですが、



それがまたとても美しい糸なので捨てずに持って帰りました。

その夜、夢か幻まぼろしかおばあさんが出てきて、

「その糸は誰だれにもあげてはならない。またその糸を拾ったという

ことを誰にも言っではいけない。私の言うことを守るならば、

そのうち必ず幸せになろう。もし、誰かにやってしまったとき

は必ず良くないことが起こるぞ。」

と言われたところで目が覚めました。（不思議な夢だなあ。）と思

いました、どうせ夢だろ

うと思っておばあさんの

話を全く気にせず、人に話

し、そのころ親しかった

村井典膳むらいてんぜんに面白がつて糸

をあげたといいます。

ところが、あのおばあさ

んがまた夢に出てきて今

度は

「このあいだ、あの糸の

ことを誰にも言うな、誰

にも見せるなどよくよく言ったのに、私の言うことを守らない
で人に話し、糸を人にやったとは、つくづく不届ふとじきなやつじゃ。

早くあの糸を返せ。言うとおりにしないとひどい不幸な目にあ

うぞ。」

と、とてもおそろしい表情でおこって言っているようでした。目

が覚めた与三右衛門は、今度はとてもおどろいてこわくなり

「これは夢などではない。良くないことをしてしまった。」

と、ほかの人にあげた糸を集め、元の拾った場所へ置いて帰って

きたといいます。

その後、与三右衛門は、その場所に住めないことが起こり、他

の所へ引っ越したということです。

それはそのころの世間でいう「山姥やまんばの糸」だったのでしょう。

山姥の言うことを聞けばどんな幸せがあったかもわからないのに、

約束を守らなかったので不幸になったのだということだ

九、二松甚五左衛門、不思議なホタルを見る

あるとき二松甚五左衛門ふたまつしんござえもんが、夜中に風が強く吹くので屋敷やしきの周

りを家来に見まわらせました。甚五左衛門の家は穴虫という所に

あり、家の後ろは山でした。

その山から、火を積みあげたようなものが飛び落ちてきました。家来が不思議に思って甚五左衛門にそのことを告げました。そこで甚五左衛門はすぐに家を出て見ると、本当に火が落ちたように見えたので、あわててその場へ甚五左衛門が行ってみると、ホタルがたくさん集まっていたものでした。

世の中では、風の強く吹く日は必ずホタルが集まるものだといいます。

京都の宇治うじでは時々あることだといいます。



錦城山のすぐ下にある穴虫

一〇、加茂村の農民、化け物にあう

加茂村かもの農民は、山代温泉に近いといいうことで、田畑で働いて

夕暮れに家へ帰ると温泉へ行くのが習わしでした。

あるとき、一人の農民が日暮れから家を出て、その温泉へ行くうとしました。その道の途中に、山代村と山代新村やましうしんとの間には火葬場ばがあります。その近くにある橋へさしかかると、道のわきにとっても美しい女が立っていました。何気なく通り過ぎると、その女が後ろから飛びついてきました。

以前から、このあたりに化け物ばものが出ると聞いていたので、「さあ、あの化け物だな。」と、その農民も必死になって組み合あったたかいました。農民は前々から用心していたのでしようか、先をとがらせた竹ペラを腰から取り出し、相手につきさすと化け物はおそれて後ろへ逃げていきました。農民もそのときとばかりに山代へ向



かいました。

やがて山代の村近くになりましたが、道の真ん中に山のようなものがあって道をふさいでいて通れません。農民は、これもまた化け物のしわざだと思い、あの竹べらでその山をつきさしました。すると、その山は向こう側にひっくりかえって消えてしまいました。

その場所を越えてからは何事もなく山代に着いて、いつものように温泉に入りました。

その帰り道、加茂村に近づいたあたりで、たいへん明るく昼のようになり、しばらくすると、また闇やみになりました。今度は真っ暗闇くらやみになったため、一足も進むことができません。農民は地面をはいながら、ようやく家に帰ったといいます。

その農民が横井其浜よこいそみんに話したと聞きま



山代温泉から見た加茂町

した。

一一、牛田千次が鬼火おにびにあう
うしだつめのじょう
牛田留丞のお父さんは千次せんじといひます。そのお父さんが堀とい

う人といっしょに、畑村はたというところへ行きました。夏の暑さにたえかねていましたが、畑村はたにしょうずは清水がわいていて涼しいと聞いたので、そこへ行って涼もうと出かけて行きました。

すると、前の方に火の玉が見えます。そのころは畑村に火の玉が毎晩出るというのが有名だった

ので、その火の玉だろうと思ひながら進んで行きました。その火は前の田んぼの道で止まりました。二人がその場所へ行つて



畑の清水は小野坂の左下にある

みると、あつという間に火の玉は消えてしまいました。そこをはなれるとまた火の玉があらわれ、二人の間をとでもすごい勢いで飛んでいきました。その火の玉のあまりの勢いに二人ともたおれてしまったとかいいます。

一二、山代村あらやの家来が化け物にであう

山代村にあらや《現・

永井家》という人がおり
ました。

ある日、上河崎村とい

うところへ用事があつて
出かけて行きましたが、
夜になつても帰つてきま
せん。あらやの家来が心
配して上河崎村まで迎え
に行きました。その道に
は八つ塚やづかというところが
あり、そこには年をとつ



今は田の中にある八つ塚

たキツネが住んでいて人をだますのだといいます。その家来はいつも通っている道なので何も考えずに歩いていましたが、道のそばの畑の中から女の人が出てきて、

「タバコの火を貸してください。」

と言いました。

（夜で、さらに女の人が畑から出てくるのは変だな。）

と思いながらも、

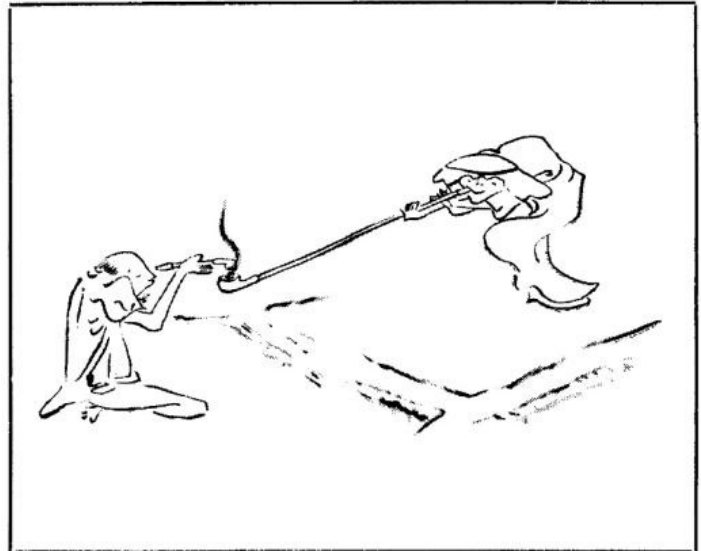
「自分もキセルでタバコを吸っているので、あなたのキセルに吹き付けて火をつけてあげましょう。」

と答えました。女は

「すみません。」

と言いながらキセルをつき出してきましたが、そのキセルはとても長くて六尺くらい《約一八〇cm》あります。家来はタバコの火を吹きつけると同時におそろしくなつて、早足でその場を通り過ぎました。

上河崎村から主人のお供をして帰る途中も、その八つ塚へ通りかかったのですが、不気味な女のことであつたのでとても気味が悪く、



『大聖寺藩史談』『聖城怪談録』より

話しながら山代へ帰っていったということです。

※『キツネはなぜ人を化かすか』：日本ではキツネはタヌキと同じように人を化かす動物として考えられてきた。しかし、それとは逆に稲荷神（商売繁盛・農業の神様）の神様の使いとして古くから信仰されてきたりしている。これは、キツネが昔から人里近くの山林に生息し、何かと人の目に触れる機会が多く、その挙動に対して人々が神秘的なものを感じてきたからだという。タヌキの話は間抜けなのが多いのに対し、キツネの話はずる賢いところが多くあり、それだけ知恵があると思われるてきたのだろう。

（また何かあるのでないだろうか）

と、畑の中を見回しました。しかし、少しも変わったところはありませんでした。

「なぜ、畑の中を見回すのか。」

と、主人が不思議がつて聞くので八つ塚のできごとを、家来が

一三、児玉仁右衛門、キツネにであう

児玉仁蔵のお父さんの仁右衛門は、たいへん犬が好きでいつも

飼っていました。その犬は、何か変わったことがあるときには必ず鳴く犬でした。

ある夜のこと、何があったのか激しく鳴くので仁右衛門は犬を連れて外に出てみました。犬は先になって福田村に続く道を行くので、仁右衛門があとからついて行きました。しかし犬はその道の途中まで来ると急に体をこわばらせて動かなくなりました。

そこで仁右衛門が向こうの方を見ると、キツネが一匹います。そのキツネは立っているのですが踊るようにも見えました。

犬がちっとも動かないので、仁右衛門はがまんできなくなつて犬をまた



下福田町

いで前に進むと、犬も仁右衛門の勢いに励まされ、歯をギリギリさせながら進み出ました。

キツネはこのようすを見てかなわないと思ったのでしよう。後も見ないで逃げ失せてしまいました。



そのころまた時枝勘右衛門の家でも、いつの夜だったか、縁側の先にある手を洗う鉢のあたりに、魚のはらわたを捨てておいたときのことです。何か音がするので、家の者が障子のすきまからそっとのぞいて見ました。すると、キツネが六匹も来て、そのはらわたを見てとても喜んでいるようで、踊り上がったりし、いろいろと楽しそうな動きをしているのが見えました。家の人たちは交代でのぞき見ては笑ったといっています。

一四、竹内宅右衛門がキツネの火をみる

竹内宅右衛門という人が、ある夏の夜、岡村というところに涼みに出かけました。すると、前の方から火が見えます。宅右衛門は、これは噂の畑村の火の玉だろうと思って田んぼのあぜ道にふせると、そつと火の玉のようすを観察することにしました。よく見

てみると、それは畑村の火の玉ではなくキツネでした。そのキツネがしつぽをまつすぐに立ててふると、しつぽの先から火のようなものが出て周辺が明るくなります。何をしているのか考えながら見ているとそのしつぽの光でイナゴを取って食べているようです。キツネがだんだん近づいてきて宅右衛門がふせて隠れているのを見つけると、キツネはおどろいて逃げるように消えてしまったといっています。



大聖寺川の北にある岡町

※『キツネの火』：昔から「キツネ火」という言葉があり、キツネが火をともしという迷信がある。また、その火の原因には口から吐く息が火になるという説や、尾を振ることによって起きる静電気が原因で発火するという説がある。

一五、伊藤平右衛門が山中の道であやしいことにあう
伊藤平右衛門という

人が、山中村へ出かけました。その途中の吸坂村のあたりで偶然に後ろから他の旅人がきたので、道中がいつしよになりました。

二人は、後になつたり先になつたりしながら道を歩いて行きましたが、平右衛門が途中で旅人の前を歩き、先へ行こうとするときで



吸坂への道、上に吸坂町がある

す。そのようなすを旅人が後ろから見ていると、なんと彼が空中を歩いているように見えます。少しの間に、平右衛門がずいぶん前へ進んで行ってしまふので呼びかけると、平右衛門はようやく気づいて立ち止まりました。

「なんと不思議なことでしょうか。あなたがいなければ、どこかへ迷って行っていたかもしれず、大変危ないところでした。」と旅人に厚くお礼をいって別れたといひます。

このことは、秘密にしていいて誰にも話していませんでしたが、最近になって人に話したということです。

一六、大野才記の家に、化け物が来る

大野才記のおじいさんは、槍の武術が好きでよく練習していました。

あるとき、そのおじいさんは槍の練習に行き、家にはおじいさんのお母さんと下女《使用人の女の女の人》の二人が残っていました。お母さんは奥の間にいました。下女は台所にいましたが、その入り口には、のれんがかけられていました。

そののれんを持ち上げながら、スウツと中に入ってくる人がい

ます。下女が、誰かなと思つて見るとそれは黒くて大きなお坊様でした。下女はひどくおどろいて、すぐに奥の間に逃げ込み、おじいさんのお母さんにそのようすを告げました。

お母さんは落ち着いた人だったので、我が子の名前を呼んで「たった今、見慣れないお客さんが来ましたよ。早く会つてみなさい。」

と、まるで息子がいるかのようにうそを言つてみせました。

そのためでしょうか、あやしい者はすぐに台所の出口の方へ出ていきました。家の者は、それが家を出ていくとすぐにあとを追っかけて出て見ましたがもうどこかへいってしまい、見えなかったといひます。



一七、橋立村の農民がムジナを生け捕る

二、三〇年ほど昔の話だといひます。橋立村^{はしたて}というところで、キツネやムジナのしわざなのでしようか、夕方や日中であっても、女や子供がだまされていたといひます。

あるとき、その村の女の一人が深田村^{ふかた}に行った帰り、何かにおそわれて寝込んでしまいました。その人の夫は大胆な人だったので、とてもおこり

「妻をこんな目にあわせるとは憎たらしいやつだ。出ていってその悪いやつをつかまえてやろう。」

と思ひました。

夏のころだったので、昼休みをのみはからって、村の者を連れて出かけて行きました。連れて行った若い村人たちをわざと、他の場所にかくれさせ、

「自分が声を上げたら出てきてくれ。」

と、話を決めて待たせておきました。自分は斧^{おの}を持って縄^{なわ}などを腰につけると、奥さんがおそわれた山道のあたりで、一人で木を切り始めました。

しばらくすると、役人の服装をした者がやってきて言ひました。



橋立町

「お前は何者だ。」

なぜここで木を切っている。

ここは木を切

ってはいけな

いと法で決ま

っている場所

だぞ。さっさ

と早く帰れ。」

夫は、これは絶

対にキツネかム

ジナの仲間だろ

うと思って、

「禁じられている場所にせよ、この木がどうしても必要なので切

っているのです。」

と答えました。するとその役人のような人はとてもおこって、

「いやなやつだ。逃がしはしないぞ」

と、ガシッとつかみかかってきました。

「よし、やってやろう。」

と夫は取っ組みあつて格闘し、最後

にはその役人のような者を押さえつ

けました。そのまま縄でしぼり、

「おい、みんな来てくれ、化け物を

しとめたぞ。」

と呼ぶと、隠れていた村の人が走って

出てきました。

「それにしても憎たらしいやつだ。こ

れまで長い間、みんなをだましたバ

ツだ。たたき殺してしまえ、打ち殺

してしまえ。」

と口々に若者がののしるので、その勢

いにたじろいだ役人の姿をした者は、

「いまさらなにを隠しましょうか。私

は、古くからここにいるムジナです。

許してください。長年、漆と砂で

身を固めているので切ろうとして



深田町

も切れませんよ。だから許して帰してください。」

と言います。しかし、村の皆は笑って、

「たとえ金や鉄で固めていても、どうして殺さずにいられようか。

斧で切れなければのこぎりでためしてみるさ。」

と言いました。

ムジナはそれを聞いてとてもがっかりし、

「こうなったらありのままを話します。どうかゆるしてください。

私はやがて高野山こうやさんのふもとへ行き、出世しゅっせすることができま

今ここで殺されたら心残りでしかたありません。これからは悪

いことはいたしません。どうかゆるしてください。」

と手を合わせてたのみます。さすがの若者たちもかわいそうに思

って

「今度またこのように人をだますことをしたら、そのときは必ず

殺すぞ。もう絶対こんなことはするなよ。」

とかたく言いかせて縄をほどきました。

それ以後は、村の人が化かされることはなかったといひます。

一八、塩浜村の農民が古ダヌキを殺す

しおはま

塩浜村というところに古ダヌキが住んでいて、時々現れて人々をだましました。

あるときのこと、村の番人が夜まわりに歩いていると、見慣れない姿をした人が来ました。それで番人は、きつとあの古ダヌキだと思つて棒でたたき殺してしまいました。でも、殺した後で見みると、それはタヌキの化けた物ばでなく、人間の姿にちがいありませんでした。

番人はおどろいてすぐに自分の家に帰り、あれこれ思いなやんでいました。

（あれが本当の人間だったら、私は人殺しの罪を犯したことになる。）



塩浜町

あれこれ考えてもどうにもならず、どうしたらよいのか分からずに途方に暮れていたとき、村の子どもたちのさわぎ声が聞こえてきました。

「古ダヌキの殺されたのがいるぞ。行ってみよう。」

などと大声で言っているのです。番人は、

（なるほど、今になって本当の姿を現したか。）

とすぐに行ってみました。

そこで見たのは、思ったとおり、本当の姿をあらわした大きな古ダヌキだったのです。それを見て番人は初めて安心して、

「私が、ああしてこうして殺したのだ。」

と、他の人に自慢じまんしたとのことです。

一九、山崎家の家来の高山治兵衛、不思議なことにあう

山崎権丞やまざきごんじやうの家来で高山治兵衛たかやまじへえという者がいました。その人の親せきで病死した人がいて、その死がいいを六地藏ろくじざという所の火葬かそう場で燃やしたときのことです。

どうしたとか、なかなか燃えなくて人々は困りました。治兵衛は他の三人といっしょに行きましたが、時間がかって退屈たいくつだ

ったので酒でも持ってこようと相談しました。

二人がそこに残り、治兵衛ともう一人の者がいっしょに酒を取りに帰りました。帰り始めてからかなり歩いたころ、前の方の畑の中に火が燃えているのが見えました。しばらくの間、その火を見ているうちに、火の中に赤く人の立つ姿が見えました。治兵衛は肝きもつ玉のすわった人で、お

どろいたようすはありません

でしたが、あまりに奇妙きみょうなこ

となので、そのまま二人とも

話さずに通り過ぎました。

全昌寺ぜんしょうじの前まで来て、二人は

初めて、不思議なことだと話

し合いました。

そして酒を用意して、また

先ほどの場所を通ったときに

は、今度は何事も無く、火が

燃えた跡あとさえなかったという

ことです。



二〇、毫摂寺で不思議なことがある

一向宗《浄土真宗》の毫

摂寺しやうじというお寺がありました

た。そのお寺の表座敷おもてざしきでは
ときどき不思議なことが起
きたといひます。

毫摂寺

ある夜のこと、寺で
住職じゆうしやくに雇やとわれて働いてい

たお坊さんが、その座敷で
寝ていると誰かだれがゆすり起

こします。何事か、と目を
覚ましてみましたが、あた
りには誰もおりません。し

かし、天井てんじやうに月のように光るものがありました。しばらくすると、
その月のように光っているものはくるくると動きだし下へおりて
きました。そして自分が寝ていた場所あたりまで下りてくるとあ
ちこちに転がりまわります。

お坊さんはとてもびっくりしてすぐに逃げ出し台所までいくと、

それまでのできごとを話しました。そして、皆で座敷へもどつて
いつてみましたが何も変わったことはありませんでした。

二一、山崎多宮、不思議なものをみる

山崎多宮やまざきたみやという人がある夜のこと、話しに出かけて帰る途中、外
馬場ばばで水たまりを見ると、白くて大きなものが見えました。綿わたを

たくさん積み上げたように見えたので、不思議なものだと見てい
るうちに、そのまます

ぐに空へあがつてい
つてしまいました。

またあるときは、

山崎権丞やまざきごんしやうの門の中

でもそのようなでき
ごとがあったといひ

ます。

これはおそらく白
サギのしわざではな
いかということです。



錦城山に住むサギ

二三、怪力の大井佐五右衛門

※1 おおいさごうえもん

昔、大井佐五右衛門というとても力持ちの人がおりました。佐五右衛門は最初、自分が力持ちとは知らなかったのですが、あるとき、手ぬぐいをしばっているときちぎれてしまったので、彼は自分の力が強いことを知ったということです。

江戸へ仕事で向かっている道中のことです。このときには佐五右衛門はまだ前髪があり、元服前だったといえます。

旅の途中に、そのころ旅人を困らせる悪い馬子《馬を引いて人や荷物を運ぶ仕事の人》がいましたが、佐五右衛門の連れの者が、ある馬子とケンカをして負けてしまいました。それを見た佐五右衛門はとてもおこり、相手の馬子に向かい組みかかっていきまし



た。相手も組みかかってきましたが、彼は簡単にその馬子を持ち上げて、二、三間《約5m40cm》ほど投げてしまいました。

それから江戸へ行って仕事を終えてのことです。前髪をそって成人となり帰る途中、ワラジが欲しくなったので、ある家に寄りました。まだ働き盛りの若者がワラジを作っているので、よく見るとどこかで見た顔でした。そして、その彼の作ったワラジが、他のワラジより値段が高かったのでどうしてか、と聞くと、

「私が作っているワラジはそんなじよそらのワラジとは作り方がちがう特別なものなので高いのです。はいてみてください。」
と言います。また佐五右衛門は、

「あなたはまだ若いのに、なぜこのような内職ないしやくをしているのですか？」
と聞くと、

「私は、人より力があることを自慢じまんに思っおもて悪いことをしてきました。去年、加賀の大聖寺藩の武士とケンカをしたのですが、一八、九歳くわいくらいの前髪のあるまだ若い侍に私は投げ飛ばされ、そのときに足が折れてしまったのです。外でできる仕事もないのでワラジなどを作っております。」

と答えました。これは佐五右衛門が前に投げ飛ばした人だったのですが、彼が前髪を剃ってしまったので気がついていないのです。佐五右衛門はかわいそうに思いましたが、何事もなかったように去っていったといいます。



上、元服前の少年の前髪
下、元服後のさかやき

あるときは、自分の家からゲタをはいて風呂桶を持ち河道へ風呂の水をくみに出かけました。水がたくさん入った風呂桶を持ち上げるため踏んばったとき、はいていたゲタが踏む力で折れてしまいました。このころ坂井数右衛門という人もおり、その人もたいそうな力持ちの人でしたが、同じように風呂の水くみはできませんでした。ゲタを折ることはなかったといいます。

また、大井主馬允の屋敷へ二人で行ったときに、佐五右衛門は

五〇目筒《一九〇gの玉を打てる鉄砲》を片手でねらいをつけてためし撃ちをしました。数右衛門は、佐五右衛門を手本にして片手でねらいをつけてためしに見ましたが、鉄砲を習っていないなかったので引きがねを引けませんでした。数右衛門は、片手で鉄砲のねらいをつけながら持ち、

「私は力みがあって
引きがねが引けないよ。君は本当に
力持ちだな。」

と、佐五右衛門の力持ちを感心していました。また、佐五右衛門は数右衛門が、片手で鉄砲のねらいをつけながら話をしてるのを見て感心したといいます。





佐五右衛門が投げたといわれる石（江沼神社）

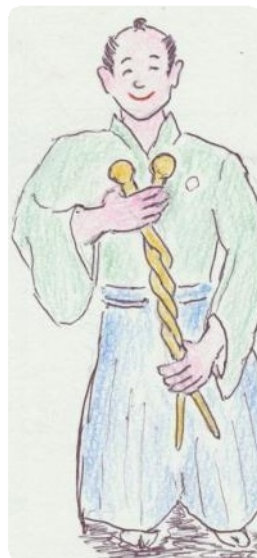
新橋の辺りに
 安達新左衛門の屋敷があります。その隣には生田直助の家があります。昔、その直助の家にあった庭石を、新佐衛門の先祖が長い間ほしがっておりましたが、八、九人がかかって持ち上げられないのであきらめていました。そこへ佐五右衛門

がやってきて、

「そんなに欲しいのならば手伝ってあげましょう。」

と石を持ち上げて、隣の新佐衛門の庭へ、塀の上越しに投げ飛こみました。今もその石は安達の家のあるといえます。

またあるとき、御馬廻り番所で、二本の火箸をふざけて縄のうにねじって巻きつけました。数右衛門が来ると、何をするんだと、元のようにもどしたとい



またその頃、越前の国《今の福井県》にある寺の住職が力持ちだと聞き、佐五右衛門と数右衛門は二人で寺へ行って言いました。「力比べをしましょう。」

「よろしいですよ。」

そのお坊さんは大変喜んで、まずお茶菓子にクルミを出してきました。二人が、

「お坊さんが初めにどうぞ食べてください。」

と言うと、そのお坊さんはクルミのカラを片手で押しつぶして食べてしまいました。二人ともこのお坊さんに勝てず、クルミを二つ重ねてようやくカラを割ることができたといいます。また、お坊さんは庭に出て、大きい竹を根元から抜いて見せました。二人ともまたこれもかなわず、竹を向こう側に押したおしてからよう



この寺の住職とは、福井県坂井市三国町の滝谷寺の和尚である。本ホームページに現代語訳の『聖城叢談』で登場し佐五右衛門をびっくりさせている。
(上の写真は滝谷寺)

前はとてもゴミで散らかっていました。それで前々から、

「ここで休んではだめだ。」

と言いついて聞かせているのですがなかなか聞いてくれませんでした。

ある日、またその木こりが門前で休んでいるので、佐五右衛門は腹をたてて、自分の家の塀へいの上から、薪を背負ったままの木こりを持ち上げると、塀の中へ入れました。木こりは大変困って、い

やく抜けたということ。このお坊さんは二人よりも力持ちだったとのこと。

また、佐五右衛門の家の前は身分の低い者が木こりをするために通る道で、毎回、薪たきぎを背負った者が休んで行くので、門の

ろいろなおわびを言ったので許したということです。

また、江戸でのことです。刀の鐐つばを売る店に立ち寄りました。あれこれと見ていましたが佐五右衛門は、

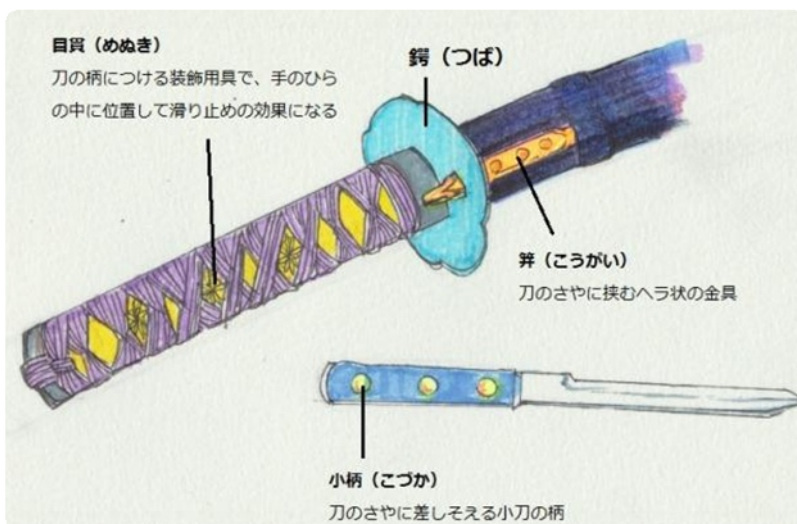
「こんな鐐では役に立たない。割ろうとすればせんべいのように割れてしまうぞ。」

と言いました。すると鐐屋は、

「それはあまりにも大げさなことでしょう。

この鐐を割ることができたら望みの鐐をさしあげますよ。」

と言います。佐五右衛門はたやすく鐐を割ってしまい、その鐐を数右衛門に渡せば、彼は二枚重ねで割ってしまいました。主人はおどろいてい



刀の鐐と小柄 現代語訳『聖城叢談』より

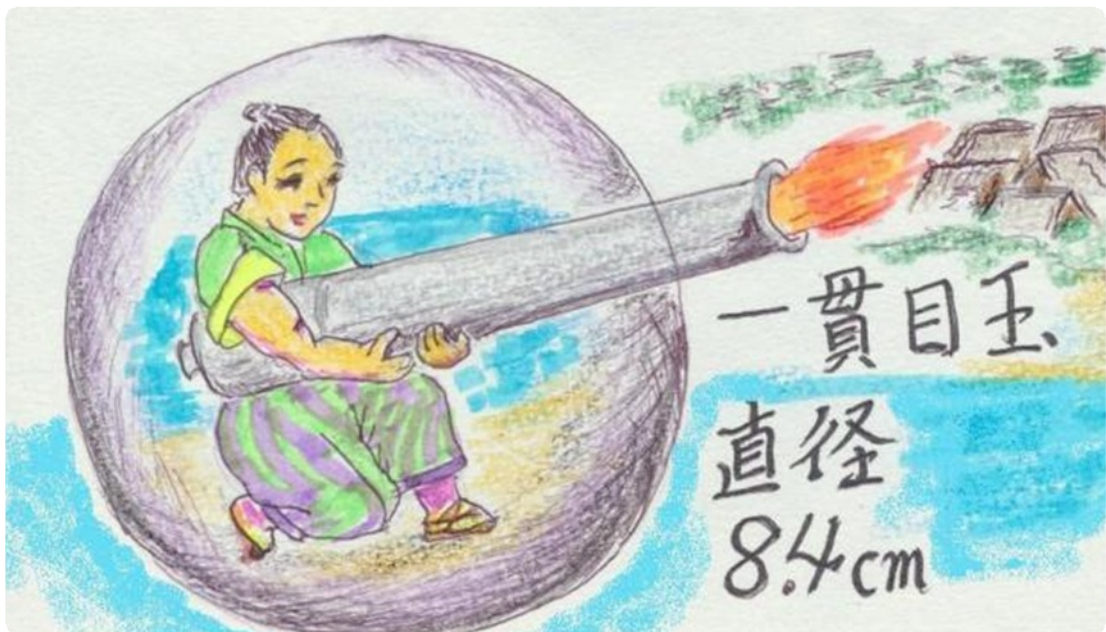
ましたが、その力のすごさに感心して望みの鍰を贈ったといひます。このとき山川弥四郎という人もいっしょにいたので、その鍰をもらい、今も山川久左衛門の家にあるといひます。

またあるとき、両国橋を通りました。橋を渡っているとスリが佐五右衛門の小柄を盗もうとするのを見つけて、そのスリの手をつかまえました。両国橋の真ん中へ行き、川の方へスリをつり出し、その両手を重ねると、

「この小柄がほしいならくれてやろう。」

と、その小刀でスリの両手をつき刺すと橋の欄干まで刺し通して帰りました。彼が帰った後に近くの者がその小柄をぬこうとしましたがぬけなかったといひます。

大機院様《二代藩主の利明》に同行して、一貫目筒《一貫目の玉を打てる大砲》を塩屋から片野村の方角へ、立てた膝を台にして打つとその音がとても大きくて、近くの村のナベや釜が全部割れてしまひ



ました。撃った玉は今も鹿島神社に奉納してあるといひます。そのあたりの海辺では、しばらくは漁もできなかったそうです。

黒瀬大堂という古い神社がありました。そこへ度胸だめしに行つたときのことです。夜中の二時くらいに、いっしょに連れて行つた犬がすくんで動かなくなつてしまひました。そして、どこからか小石をさかんに投げつけてくる音がします。佐五右衛門は少しもこわがることなく、ようすをうかがつていましたが、そのうちに目の前に大きなものが落ちてきました。

（これは何だろうか。）と手にとつてみると、人の手足でした。き



黒瀬町の神社

つと何か妖怪ようかいのしわざだろうと思ったのですが、本当に人の手足だったので、木の枝に結び付けて帰りました。

次の日にその場所に行ってみると、手足だと思ったのは枯かれ木だったということです。

※3 犬機院いぬがへ…二代大聖寺藩主前田利明まへだとしあきのこと。三代加賀藩主利常の五男で初代大聖寺藩主利治の弟である。万治三まんじ（一六六〇）年、利治に子どもがいなかったため金沢から二代大聖寺藩主としてきた。彼は矢田野用水を引き新田を開発し、片野大池からトンネルを掘るなど多くの事業をすすめて藩の基礎を築いた。

二三、岡本登、川崎で竜が天に昇るのを見る
※ アユをテンカラでひっかけてとる漁があります。

あるときのこと、「新之丞淵しんのじょうふち」という川の深みへ、岡本登という人がテンカラでアユとりに行きました。天気もよく風もなかったのに川上の岸がくずれて崖がけになっている所からドウドウと音がしました。そして、川の中へ何かが走り出し、川の中で水をどんどん巻き上げていました。反対の岸に畑がありましたが、そこにあるキビやゴミなどもみんな巻き上げていきました。

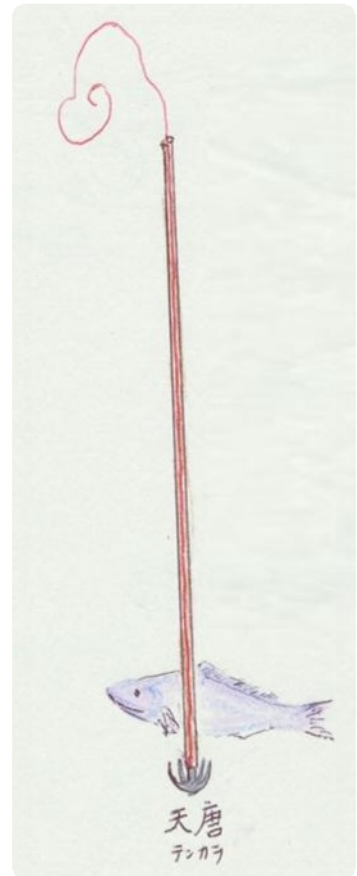
その中に何か蛇へびのようなものが見えました。そのうちに吸坂山すいさかやまの方へ巻き上がっていったといいます。

この話は高沢甚左衛門たかざわじんざえもんが、岡本登から聞いたものだそうです。

※『テンカラ』…何本かの針がイカリのようになってるのがテンカラである。これをサオの先につけて、水中の魚を引っかけ、アユやサケをとった。御算用場留書ごさんようばとめがきによれば、享保一七年ごろ、藩士はテンカラザオ一本あたり二匁もんめ（銀で七、五匁）を藩に払って漁をした。殿様も織部河道で楽しんだという。

※1 犬井佐五右衛門いぬいさごえもん…人持の大井司馬允ひともちのおおいしまのじょうの分家の武士。初代の大井市兵衛から砲術ほうじゆつを学び、兄から一〇〇石を分けてもらい藩士はんしとなった。茶道や建築に才能があり、長流亭ちやうりやうていの建築のとき奉行を務めたという。怪力が有名で多くの伝説がある。

※2 坂井数右衛門さかいしうえもん…先祖は加賀の国出身。三代加賀藩主利常に二〇〇石で仕えた。その子が大聖寺藩に仕え、二代目が数右衛門である。はじめ二五俵ごさんようばを受けける下級の武士であったが、のち御算用場奉行などを務めた。



二四、室田弥兵衛の屋敷で物干しざおが天に昇る

ちようど春のころ、天氣の良い日だったので、足輕が多く住んでいた弓町ゆみちやうにある室田弥兵衛むろたやへえという者の家では物干ざおものほしで着物を干していました。ところが不思議なことに、風が少しもないのに着物と物干ざおがいっしょに空へ舞い上がっていきます。それを見た人たちはとてもおどろきました。

やがて着物は近くの木にひっかかりました。さおは、雲のあるところまで上がって見えませんでした。五、六町ちやう《約六〇〇m》ぐらい後ろの田んぼの中に落ちたそうです。

そのとき室田の家の後ろにある田んぼ一枚ぐらいの水や泥が、いっしょにわき上がったとかいいます。

この話は、成田弥左衛門なりたやざえもんが近所に住んでいたので、本当に聞いたそうです。



二五、片谷村の者が仏様を信じて狂う

いぬ 戌年の正月八日に、片谷村へきたにむらの組合頭くみあいがしらであつた清吉せいきちの息子むすこの善兵衛ぜんべえという者が突然、

「あなたがたは仏を信じるといっても、まだ生きている仏を拝むことはできなかったでしょう。今すぐに拝ませてあげます。あ、五色のきれいな雲がたなびいて、そのそばに生きた仏様がいらっしやいます。みなさん、あれを拝みなさい。」
 と言って、たいそう喜んで踊りだしました。

村人の二人がこれに従って

「本当に生きた仏様だ。」

といっしょに喜びながら踊りました。

このことを聞いて、善兵衛たちが踊っている理由を知っていようと知らなかりうと、村の者は残らず喜んで踊りだしました。踊りだす人がとても多かったので、イロリに板の戸を渡して場所を広げて踊ったといいます。

そして、善兵衛は、

「本当に仏様がいらっしやる証拠しょうこはこれです。」

と言って、筆で紙に一本の棒を簡単かんたんに引いて見せたといっています。

本当に、狂った人のようでした。

それで、村役人ならばこのさわぎを静められるだろうと、肝煎きまじりの平兵衛の家へ使いを送って知らせたということです。

平兵衛はすぐに来て、



「どうしてこのようなことが起こったのだ。みなさん、気を静めなさい。」

といろいろに言い聞かせましたら、一〇日ほどたったころ、みなが正気を取りもしました。しかし、あの善兵衛だけは、まだ正気にもどりませんでした。どうしようもなく、閉じ込めておきましたが、だいぶあとになって正気にもどったということです。

善兵衛は今も生きていると平兵衛が私に話しました。

二六、橋立村の泉之間に大亀がいる

橋立村はしたてむらの泉之間いずみのまというところに、大きな亀かめがいました。村の人

もその姿全体を見たことはほとんどありませんでした。

橋立村には毎年、足輕あしがらの身分の武士が船を見張る当番に来てい

ました。ある年、上田理左衛門うえだりざえもんという人が当番になったので橋立

村へ行っったときのことです。

その日は天気がとても良かったのでこのあたりを見渡していた

のですが、泉之間に角^{かど}が立って色がとても黒い岩のような物が見えます。しばらく眺^{なが}めているうちに、その岩のようなものがゆっくりと動き出しました。不思議に思って、村の人に聞いてみると

それは亀が頭を持ち上げたところだとい
います。遠くから見た
ので確かではないの
ですが、その亀の大き
さは両手で抱^{かか}えられ
ないくらいあるよう
に見えました。そのう
ちに亀はだんだん海
の方へ移動して、つい
に海に入ってしまった
ので姿が見えなくな
ってしまったという
ことです。



泉浜（泉の間）、奥に船番所があったという見山がある

二七、西村新四郎が橋立村の番所であやしいことにあう

橋立村の足輕^{はしたてむらあしがら}が詰^つめた船番所^{ふねばんしよ}は、三方が民家に並んでいます、

一方は海に面しており、そばに松の木が二、三本生えています。

昔からこの松の木には化け物^{ばもの}が住むという言い伝えがありました。

その番所は六疊^{ろくじよう}くらいのせまい場所で、中にはイロリがあり、そ

のそばで当番の人が寝^ね起きしていました。

西村新四郎という人が、当番になったのでその番所^{ねどま}で寝泊^{ねどま}りし

ていたときのことです。ある夜、夜中の二時くらいに彼が寝^ねてい

る番所の屋根の上から、ものすごい音がします。新四郎が目覚

まして見ると、月の光に照らされて障子^{おおい}にうつるのは、ひさしの

上^{おおいにゆうじゆう}にいる大入道の影でした。しかし、その大入道は中へ入っては

きません。

さて、番所の中のイロリにはカギが二つ、つるしてありました。

一つにはヤカンをかけていたのですが、そのヤカンがこちらのカ

ギからあちらのカギへと一度に移ります。新四郎はおどろき、（こ

れは、どうにもあの坊主のせいだろう。）と思い、そのまま障子^{しょうじ}を

開けて出ていきましたが障子の外には誰^{だれ}もいませんでした。そし

て部屋へもどるとヤカンは元の場所にかけてあり、なにも変わっ

たことはなかったといひます。これは何のしわざだったのか分からないと、話していたということでした。



イロリのカギ（北前船の里資料館）

二八、長局にて女の人があやしいことにあう

清瀬きよせと言う局つばねがおりました。その清瀬の部屋とまりの隣に三番部屋という空き部屋がありました。あるときに、清瀬に仕えていた下女が、ある事情で仕事をやめることになったのですが、次に行くところも決まっていなかったため、二、三日はそのまま御屋敷おやしきにいることになりました。

その夜、皆が寝ようとしてそれぞれが自分の部屋に行くとき、その

下女げじょは空き部屋で寝ると言い出しました。他の侍女じじょたちは、

「あの空き部屋はイロリに火もついていないから寒いでしょう。

いっしょに部屋で休みましょう。」

と言ったのですが、彼女はそれを聞かずに空き部屋に行って寝てしまいました。すると、夜中てんじょうに天井おから下りてくる音がします。それはそのまま彼女の上にのぼると、体を上から押さえつけようとするのでとても息苦しいものでした。声を出そうとしたのですが、声が出ません。そうしているうちに夜が明けて、その何かはどこかへいってしまったのか、いなくなりました。

下女が朝に起きていくと、顔色がとても悪く具合ぐあいも悪そうなようすだったので、みんなが何があったのか聞くと、夜中よなかにあったできごとを語ったといひます。そして、彼女の手を見ると、人につかまれたようなあとがあり、とても痛そうに腫はれていました。そういわれてはじめて下女は手が腫れているのに気づき、とても痛がつたといひます。

そこで外科医げかいの関沢宗意せきざわそういという人を呼んで診みてもらいました。宗意は変だなど首をかしげ、

「この症状は普通の症状ではない。体の中から出た症状でもなく、

外から傷をつけられたようにも見えない。こんな症状は見たことがない。」

と大変不思議がりました。けれども、塗り薬などをぬって、何日か経つと治ったということです。その空き部屋の天井をみると天井の板はだいぶ破れており、竿ぶち《天井板を支えるために取り付けた細長い材》も折れていたということです。

そのころ、例の空き部屋のあたりに廊下があるのですが、その廊下で丸くて白いものが転がっていくのを見た人もいました。あるいは、白く長いものが立っていたこともあるといいます。またその部屋の中へ黒い入道《お坊さん》が入っていたのを見たという人もいます。

ある夜に、空き部屋に一人で女の人が寝ていると夜中ごろに、竹で背中を何度も突かれていたような気がします。おどろいて部屋から逃げて出ていったのですが、背中には何の変わりもありませんでした。

また、あるときはその部屋で服をたたんでいる音が聞こえるのですが、中へ入ってみると誰もいないということが時々あったということです。

二九、吉田丹右衛門の下女、あやしいものを見る

この年の正月一八日の夜、吉田丹右衛門に仕えていた下女が外馬場の近くを通りかかったときのことです。そのあたりには中川左江隅という人の屋敷がありました。その家の前を通りかかったときに馬場の松の木の上が少し明るいように見えました。（なんだろう。）と思ってその下へ行つて見ると渋紙《防水の紙》の二、三枚の大きさに見えるものが松の上から下りてきます。その色は火の光のようにうすいもので、不思議に思っていると松の上から下へ落ちてそのまま消えてしまいました。下女はびっくりして逃げ帰り、このできごとを話したということです。



三〇、永町の夜回りをしてたものがつかまる

ながまち 永町の夜の見回りをしていた番人が、あるとき、御米蔵の近く
ひょうしぎ を拍子木を打ちながら見回っていると、誰ともわからない、とて
つもなく大きな人がやってきました。そして夜回り番人をガッシ



リつかむと六尺しゃく《約一八〇cm》くらい持ち上げました。彼はおどろきましたが持っていた拍子木でその大男をたたきつけると、大男はそのつかんでいる手をはなして夜回り番を下へ落としました。すぐに上を見上げてみましたがもう誰もいません。だれその大男の手には針金の

ような毛がたくさん生えていたといいます。

そして夜回り番がつかまれたところは爪のあとが付いていたと、その人を見た人が言っていたそうです。

※『御米蔵』：正しくは

ながまちおくら 「永町御蔵」と呼ばれ現在の大聖寺高校の場所にあった。大聖寺藩の村々の年貢米が保管されていた。常に番がいて見張っていたという。また、塩蔵は福田橋のはじのところにあったとある。



永町御蔵あと（大聖寺高校）

三一、魚屋弥兵衛が八間道でうなじをつかまれる

うおややへえ 魚屋弥兵衛という人は前から相撲すもうが好きで、ずいぶん強く勇ましい性格の人でした。

あるとき、遠くに出かけていて帰りが夜中になりました。途中、

八間道を通りかかると何者かが弥兵衛のうなじをつかんで持ち上げます。

「これは。」

と言って見上げると、そのつかんだ手はなれました。

それから少し行くとまた何者かがうなじをつかみます。そして今度は六尺しやく《約一八〇cm》ほど持ち上げられました。あつ、と思つてつかんだその手をたたくと、簡単に手を払いのけることができ、下へ落ちたといいます。

その後、その話を他の人にも話して不思議がったということです。

三二、長沖屋治兵衛が慈光院の辺りで気味の悪いことにあう田中七之進たなかしちのしんという人の家へ、長沖屋治兵衛ながおきやじへえという町人が夜話をしにでかけ、夜中に帰ってきたときのことです。

帰り道の途中に慈光院じこういんというお寺の前までくると、提灯ちようちんの火が何もしていないのに消えてしまいました。火は人が吹き消したよううで、そのうえ、治兵衛の口の辺りを何者かがなめまわします。そのなめられたところがくさいことといったら例えたとようがありません。

せん。治兵衛は不気味ぶきみでおそろしくなったので、大急ぎで宿へ逃げ帰りましたが、なめられたところがくさくてたまらず、いろいろと何度も洗ってみたのですが、二、三日はそのくさが取れなかったということです。



山下神社



慈光院あとの碑がある山下神社境内

三三、坂井数右衛門が畑山はたやまで化け物にであう坂井数右衛門さかいかずうえもんが、あるとき畑山はたやまというところに木を伐りたおして



畑山町（中央奥に小野坂トンネル）

いました。

数右衛門は有名な勇敢な男だったので、これはよい気晴らしだと思っ
て見物していましたが、またその後ろから同じように青白く顔の長い人
がやってきてその火を吹き消しました。数右衛門は少しもこわがる
ことなく、木を取って帰ろうとしましたが、家来が

置いたので、夜になって家来といっしょにその木を取りに出かけました。畑山をのぼって行く
と、前の方から青白く顔の長い人が手の中に火をと
もしてやってきました。その姿を見るやいなや、家来
はこわくて気を失ってたおれてしま

まだ氣を失っているので仕方なく家来を肩にかついで帰ることに
しました。

これは、坂井弥次郎がおばあさんから聞いた話です。弥次郎のおばあ
さんは義父の数右衛門から聞いていたので、よく知
っていて話したといいま
す。



三四、木村右膳の家来が白サギの化け物ばけものを生けどる

きむらうぜん 木村右膳の家来が山中村というところへ出かけて、夜中に帰っ

てきたときの話です。

※かつらしょうず 桂清水と土谷 つちだに 《上原町の出村》 うわはらまち

というところの間で道の真ん中に白くて長いものが立っていました。その家来はとても勇気のある人だったので、ようすをうかがって足と思われるところへお

そいかかつて、
 それを捕まえてし
 まいました。する
 と、何やらバタバ
 タとあばれるので
 すが、家来は気に
 せず持ち運び、土
 谷で民家に立ち寄
 ってから捕まえた
 ものをよく見まし
 た。それは年とつ
 た白サギらしい大
 きいものでした。
 そのまま殺して
 しまうと、家に帰
 って煮て食べてし
 まったと話したということです。



桂清水

※『桂清水』：山中に、木の幹八メートル、高さ一五メートルの樹齢五〇〇年といわれる大きな桂の木があり、その根元の岩間から清水が湧き出ているのでこの名前がつけられた。夏にも涸れず、山中への休憩所として昔から必ず旅人が足を止めた場所である。また桂地蔵と呼ばれる地蔵が桂のそばのお堂にある。

三五、木こりの三郎、化け物に投げられる

三郎《木こり》の三郎という者がいました。高尾村の者でした。が大聖寺に住んでいたので、時々、高尾村へ夜話に行きました。あるときのこと、いつものように高尾村へ夜話に行きました。が、夜中ごろに帰ろうとしました。寒さも厳しい季節だったので、薪をもらい背負って高尾村を出ました。

途中に大聖寺の方に降りる斧坂《今の小野坂》があります。そこへ来たときに、後ろから何者か分からない者に三郎はつきたおされました。しかし、この三郎は、あまりさわぎたてる人ではないので、（どうかしてころんでしまったか。）と思って、何とも思わずにまた歩きだしました。すると、すぐにまたつきたおされます。三郎はおどろいて後ろを見ましたが、誰もいなかったのです。

あやしいできごとだったので、そのあとは夜になると、そこを通らなかったといえます。

三六、深田村の称名寺の使いの者が化け物に出会う

深田村に称名寺というお寺があり、そのお寺の使いの者が用事があっていろいろな村の信者の家を回っていました。



称名寺

夜になったので
大聖寺の町人の麦
屋久次郎という人
から提灯を借りて
深田村に帰ろうと
したときのこと
です。
おのざか 斧坂 《今の小野
坂》の上を通りか
ったとき、何事もな
いののに急にゾッと
鳥肌が立つように
おそろしくなりま

す。それで寺の使いは足早にその場所を通り過ぎました。

坂をこえると橋があり、
その橋の近くまで行くと
女の人らしい者が風呂敷
包みを背負って向こうか
らやってきます。その女
とすれちがおうとしたと
き、女は「シッ」と言っ
て息を吹きかけてきまし
た。その息がものすごく
臭く、使いの者はとても
おそろしくなったので急
いでその場を行き過ぎま
した。

そのうちに、使いの者は（このような夜は、またこの先に何かあるかわからない。深田村はまだまだ遠いから大聖寺に引き返そう。）と思って今来た道を引き返すことにしました。すると、先ほどの女が道の真ん中にまだ立っています。そして、



「あなたが、宿へもどっても私に会ったことを絶対に人に話してはいけませんよ。」

と言いました。使いの者は恐怖のあまり返事もできずに逃げるように帰っていき、大聖寺の檜田順格の家をたずねました。そしてあいさつを簡単にすますと、そのまま寝込んでしまったのでした。その顔色が普通ではなかったため

「もしか、化け物にでも会ったのですか？」

と順格は聞いたのですが、使いの者は何も答えてはくれませんでした。

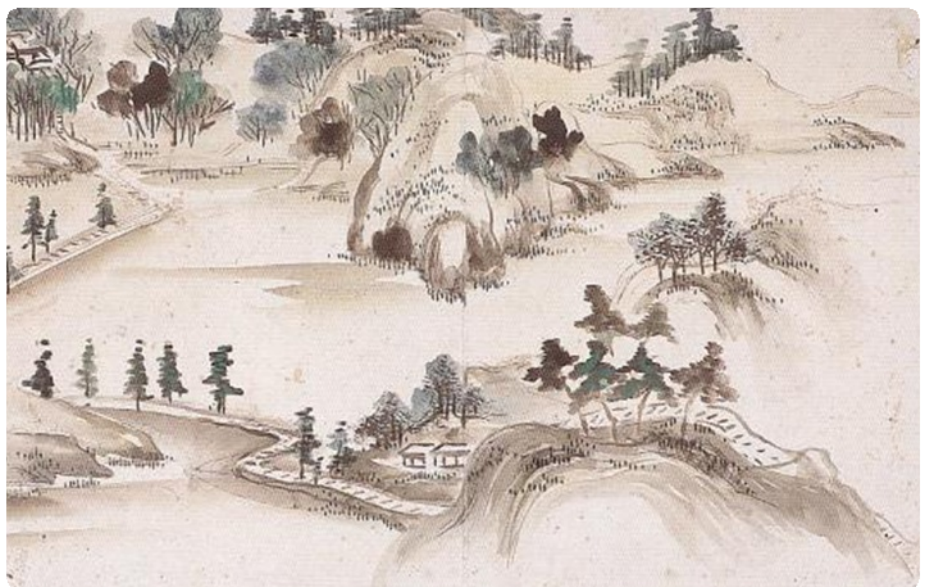
そのまま寝込んで三日ほど起きてこなかったといひます。

その後、だいぶ時間がたってからこの話をしたということです。

三七、深田村九次郎、あやしいことにあう

同じ深田村に九次郎という者がいまして、大聖寺の商人である丸岡屋清右衛門という者の子どもを育てていました。

ある日のことです。清右衛門の家へ九次郎が来て、夜になって帰りました。夜のことなので提灯で道を照らしながら帰っていたのですが、深田村の少し手前の笠伏山というところにさしかか



斧坂 『錦城名所』より

ったときのことです。

小さな子どもが一人あらわれ、九次郎が持っていた提灯をうばい取ったのです。九次郎は勇気のある者だったので「逃がさないぞ。」

と子どもを追いかけて、提灯を何とか取り返しました。しかし、取り返すとまた来てうばい取っていき、そんなことを数回くり返しました。

ようやく取り返して村の方へ逃げたのですが、その子どもは村の入口まで追いかけて来たという事です。

九次郎が家へ帰り中に入ると、顔は青ざめて摘み取られた草の葉のようにしおれているので、家の者はみなおどろきました。

九次郎の息子も心配して、

「どうしたのですか。」

とそばに来きたのですが、

「それ、またそこに来た。」

などと九次郎は大声でさげびます。となりの家の人たちも、さわぎを聞きつけて来て、いろいろ言って九次郎の気をしずめようとなりましたが、しずまりません。そして、狂ったようにさわぎ続け、



提灯（北前船の里資料館）

かなりたってから疲れて寝てしまったそうです。

翌日になって目が覚めると、やっと正気にもどっており、前の夜のできごとを話したということです。

※『丸岡屋清右衛門』…大聖寺町の本町に住み酒造業を営んでいた。弘化三（一八四六）年には、町人を町奉行の下で治める町年寄に多くの商人のうちから命じられる豊かな商人だったようだ。

三八、大幸百助がキツネの脱したカモを集める

※おおよそかもすけ

大幸百助という人が、ある雪の降るときに、下河崎というところを通ったときのことです。

キツネが一匹カモをくわえて前から来るので、そのキツネが持っているカモを横取りしてやろうと追いかけてきました。しかしキツネはカモをくわえながら逃げていきます。その逃げて行く途中に田んぼのあぜ道があり、カモをそのあぜ道にかくして逃げていったようでした。そのカモをかくしたと思われるところへ行き、よく見てみると、ようやくカモの羽が少し出ているところを見つけました。雪を払いのけて取り出すと、カモを縄でくるくるとしばるようにならうめてありました。百助はたやすくキツネからカモ



を横取りすることに成功して帰っていききました。

またあるときは、八日市の九艘橋のあたりで、またキツネがカモをくわえていたので追いかけていくと、キツネは逃げて九艘橋の川を渡り、向こうの岸へ上がっていきます。それを後ろから見ていたのですが、カモをどこかにかくしてしま

ったのか見当たりませんでした。そこで、川の土手の上や下を探し回ったのですが、見つかりません。そのうちに、向こう岸の土手の下の木にすき間があり、カモの首を羽の中へ曲げこんで、そのすき間へ押し込んであったといひます。これもキツネが川を渡る間にかくしたということです。

※『大幸百助』…先祖が初代大聖寺藩主利治に仕え三二俵をうけた。次の子、一夕は百助とも名のり二代利明のとき小坊主に、三代利直の時代に御徒組に

なり、家名を逢坂から改めた。三代目の百助は利考が八代藩主になるころ御近習頭から御槍奉行などになり、一五〇石を受けた。

三九、富塚村孫（源？）右衛門、あやしいことにあう
富塚村の源右衛門という、野尻後藤太のこ

ろで雑用の仕事をする下男がいました。

ある夜のことです。その源右衛門は八時ごろに猪谷喜三次の家へ、以前から気楽な仲だったので夜話に出かけ、一〇時ごろに帰りました。しかし、後藤太の家に帰ろうとしたのですが、何かに気を迷わされてしまったのか、提灯の明りをつけて持ちながら大聖寺の町の中をウロウロと歩いていました。

夜通し歩いたのでロウソクも多く使ったはずなのに、それをどこで買い求めたのでしょうか、いつまでもロウソクの火をつけて歩いていました。

夜が明けた五時ごろ喜三次の家の前を、源右



富塚町

衛門が二度も提灯を持って通ったので、喜三次の父が源右衛門を見つけて呼びとめ、家のなかに入れました。そして、どうしたのか聞いてみると、そのときになってやっと源右衛門は我に返りました。それから、後藤太の家へもどっていったということです。

四〇、慶徳寺の井戸から火が出る

天明五てんめい《一七八五》年、九月慶徳寺は、門のなかに掘り抜き井戸きようどくじを掘らせました。

この掘り抜き井戸というのは、鉄の棒を一四、五間《二五mあまり》ぐらい深く地下に打ち込んで、その棒を引き抜くと、下から水がわいて出るものです。

慶徳寺でもいつものように棒を打ち込んで棒を引き上げると、水がたくさん一〇間《約一八m》ぐらい高くふき上げ、黒い煙のように濁った水が空へ上がりまし

慶徳寺



た。

しだいにふき出す勢いが弱くなって、日暮れごろには地面から三尺《約九〇cm》ほどわき上がっていました。そのとき、見物の人が提灯を持ってその水のそばに近づくと、なんと不思議なことに水中※から炎ほのおが上がりました。

炎は八、九尺しゃく《約二、五m》ほど燃え上がり、水は無くなり炎だけが燃えています。それを見て人々はおどろき、すぐに水をかけて火を消そうと

しましたが消えませんでした。しだいに、火の勢いは強くなっていくので、掘り抜いた穴に石を打ち込んで消そうとしました。それでも炎は石の下から四方にふき出し、防ぎようがなかったので、



しかし、そのあたりに住む老人が来て、

「地下から燃え上がる火を消すには、箕である以外に方法は無い。」

と教えたのです。それで人々はすぐに箕であおると、たちまち火は消えたとかいいます。

※『水中から炎』：草鹿璠（蓮溪）が書いた『松下筆談』にもこのできごとが出てくる。天明年間（一八八〇年代）に慶徳寺で、井戸掘りをしたとき、打ち込んだ竹の筒からイオウのおいがし紅の炎が激しく噴き出し、草鹿も行つて見たと書いてゐる。



箕 (み)

四一、夜の御書院であやしい音がする

※けんしょうこう としみち 顯照公 《五代藩主の利道》 ごしよいん が治めなされたところに御書院とい
う部屋の工事があり、昼間は大工がたくさんいてノミやカンナの
音がうるさいほどしていました。



藩の御屋敷の御書院 『加賀市史 通史上巻』より作成

そのころの夜中ごろ、人々は寢静ねまっているはずなのに、御書院から昼間のようにノミやカンナの音がします。頭番所かしらばんしょ《組頭くみがしらが警備けいびするためにいる所》が御書院から近いので、そこにいた夜の警備当番の者が見に行つたのですが何の異常もなく、当然何の音もしなかつたということです。

何者のしわざかわからないままだということでした。

※『顕照院利道』…五代大聖寺藩主で、金沢から迎えた四代藩主の利章の子。

男の子どもは富山藩主利幹、七日市藩主利以、大聖寺藩主利精、利物となり、娘の正は加賀藩主の妻に、崎は喜連川藩主の妻になる。

四二、坂井弥四郎の祖母が山中温泉でお化けを見る

坂井弥四郎のおばあさんが山中の温泉に入りに行ったときのことです。

温泉から帰る日の明け方にお風呂へ入りましたが、お湯の中から五才くらいの子供がお湯の上を手でたたきながら近づいてきます。その子供のようにが気味悪く、そのまますぐ風呂から出ると人に今起こったことを話し、いっしょにもどってみましたが、誰もいなかったということです。

四三、目の見えない養順、天狗をこわがる

目が見えない養順という人がいます。その養順がまだ目が見えていた昔のことです。養順は百姓をして高塚村に住んでいたのですが、菩提村の境まで薪を伐りに二、三人で行きました。仕事場は家から遠いので、そこに簡単な小屋を作って夜は泊まっていた。



その夜のこと、寝ている小屋へ何者かが小石をさかんに投げつけてきます。また、刃物を研ぐ音なども聞こえ、さらには木を伐る音も聞こえてきました。そこにいた者は皆おどろいて、「これは天狗のしわざだ。おそろしいことだ。」と、静かに身をひそめていました。

その中の一人が、「昼に食べ残した塩サバがある。塩サバは天狗の嫌いなものだと聞いている。これを下げてある所には天狗が来ない。」

と言いました。それで、すぐに塩サバを小屋の軒先に下げました。その塩サバをたよりにしておそろしくて長い夜を過ごしました。

夜明けになって小屋の外に出て見ると、あたりには小石のよ

うなものは一つもありません。木を伐ったあとも見えないので、これはきつと魔神まじんのしわざにちがいないと、皆で話していたそうです。

四四、日谷村の七右衛門、だまされる

ひのやむら しちうえもん
日谷村に七右衛門という者がいました。以前から七右衛門は仏

教を信じていて、山中村やまなかむらにいる

仲間の信者のところへ、時折ときおり

「荒木越あらきごえ」という峠とうげを通って、

夜中であつても行き来していました。

ある夜、いつものように夜中

ごろに山中村を出た帰り道、
かつらしょうず

桂清水というところまで来た

ときのことです。

七右衛門は、刀を腰につけた

一四く五歳の子どもの二人連れが前の方を行くのを見かけました。

（夜中なのに、これはあやしいことだ。追いついて見てやろう。）と七右衛門は思い、速く歩くと二人も速く歩き、おそく歩くと相手もおそくなります。とにかく、追いつくことができません。

二人は村に近くなるといなくなり、村をはなれるとまた現れて、先ほどのように前を歩きます。二人の話に耳をかたむけると、ほろ※びた山口玄蕃やまぐちげんぱの時代のことなどを語り合っているのです。



現在の二天橋

七右衛門はあやしく思い、とてもこわかったのですが、どうしようもなかったので後ろからついて行きました。
にてん
二天というところの橋近くまで来ると二人は消えて、行方が分からなくなったということです。



荒木越の荒木の神社横出口

※『山口玄蕃宗永』：豊臣秀吉の天下の頃の大聖寺城城主。秀吉の死後、関が原の戦いと同時期に豊臣（豊臣）を守ろうとする西軍（光成側）に味方し錦城山に籠った山口玄蕃を、東軍（家康側）に味方した前田利長が攻めて、前田軍が勝ち山口玄蕃は滅びた。全昌寺に首塚と石碑がある。この戦い以降、加賀藩前田家（のちに支藩して大聖寺藩）が大聖寺を治める。

四五、国本四右衛門、化け物になげられる

国本四右衛門という人が、以前に染物屋をしていたときのことです。

ある日の暮れごろ、家の染物の用で耳聞山という所を通って家へもどりました。四右衛門はお客からたのまれた染物を風呂敷に包んで持っていました。

耳聞山の山がなくなるあたりを歩いていると、後ろから何者かが来ます。そのときは雨が降っていて、後ろから来た者が、
「その傘に入れてくれ。」

と言うので、傘に入れてやりました。

しばらく行くと、その者は四右衛門の肩をグツと強くつかみました。四右衛門は、

（これはきつと気の狂った人だろう。）
と思い何とかして追いはらおうと、はいていた下駄を手に持って



大聖寺川の北岸、藤の木町

相手をたたきつけました。すると相手はどこへ行ったのか分からなくなりました。

あやしい者に出会ったものだと思いがら、町から遠くはなれた藤の木というところを通ったときのことです。

突然、「ヤッ。」という声がすると、急に何者かに四右衛門は空中へ投げ上げられました。そして、その道のわきにある川の中にさかさに落とされ、生きた心地がしませんでした。四右衛門はようやくの思いでは

い上り、全身がドロまみれになりましたが痛みはありませんでしたから、なんとか家にもどることができました。

四右衛門の家へ話に来ていた若い者たちが、四右衛門のようすを見てたいへんびっくりし、どうしたのか聞くので、四右衛門はそれまであったことを話しました。そして、

「お客から預かった風呂敷の荷物を落としてしまった。皆さん、なんとかして取ってきてください。」

と、熱心にたのみました。

しかたなく、たのみを聞いた若者たちが、二、三人で取りに行ってみると、四右衛門が投げられたと思われる場所がありました。

そこには、ドロがはね上がったあとがあり、二つの下駄がそろえられて、風呂敷包み^{ふろしきづつ}がその上にのせられていました。人々は、不思議なことだと思いつながら、荷物を持って帰ったといいます。

それからは、四右衛門は二、三日寝込んでいたということです。

四六、勅使村願成寺の住職、ユウレイにあう

勅使村^{ちよくしむら}という所に願成寺^{がんじやうじ}という一向宗^{いっしやうしやう}《浄土真宗^{じやうとしんしやう}》の寺があります。この寺の前の住職^{じゆうしやく}が、お寺の本堂のわきにある小部屋に寝^ねていました。

ある晩の真夜中ごろ、住職がふと目覚めると、何者かがお堂の方^{からかみ}の唐紙^{しやうじ}の障子戸^どをソーと開ける音が聞こえました。住職は、

「これはきっと盗賊^{とうぞく}にちがいない。」

と行灯^{あんどん}のかげからそつとのもぞいてみましたが、それは盗賊ではなく、白い顔をした者で、スーッと部屋に入ってきて、障子^{しょうじ}のあたりで、ツツと立っていました。(こ

れはユウレイだろうか。)と思って、住職は静かにかくれていました。その者は障子戸に手をかけながら住職の方を見て、首を伸ばしてきてのぞき、冷たい息を住職の顔にフーッとかけてきました。住職はもうがまんできなくて、「ワァッ」と叫んで台所へ逃げ出し、すぐに気を失ってたおれこみました。



願成寺

寺にいた者たちはたおれた住職を見ておどろき、薬などを飲ませてあれこれ介抱かいほうすると、そのうちに住職は正気にもどり、起ったことを話しました。

しばらくして、その村の信者の一人が、

「私の家の女が死にました。」

と寺へ知らせてきました。それを聞いて、

「きつと、その死んだ女の

たましい

魂が知らせより先に寺

へ来たのですな。」

と語り合ったといひます。



四七、森田長左衛門、大女を見る

もりたちょうざえもん

森田長左衛門という人が、まだ若かったころに、藩の仕事で穴虫

まえだゆきえ やしき

という所へ夜中に行きました。道の途中には前田鞆負の屋敷があ

へい

り、その前に塀があります。その次には藪やぶがあつて、藪の所には

かきね

垣根が作られています。

長左衛門がその塀へいと垣根の間に通りかかったとき、大きな女が

塀の上に寝ねています。そして長左衛門を見て笑いました。長左衛門は気味が悪くて足を速めて通り過ぎました。

きより

かなりの距離を過ぎたので、江守織人の屋敷の横にある垣根の

えもりおりと

角で用をたし、後ろをふりかえつて見ると、さきほどの女が立っていました。身長は六尺《約一八〇cm》ぐらいもあろうかとみえました。

長左衛門がおどろいて見ているうちに、大女は向こうの方へサツと行って、瓜生伝うりゆうつとむの屋敷の塀を足でまたぎ、屋敷内に入っていました。それを見て、長左衛門は大女が化け物ばものだと分かり、ひどくおびえながら仕事を終えて帰ったといひます。

またある夜のこ

そとば

と、外馬場のあたり

で、後ろから何者か

が長左衛門を呼び

とめまします。後ろをふ

り返ると、以前に見

たような大女です。

またあの化け物だ



と思い、早足で通り過ぎて後ろを見ると、女はどこかへ行ってしまう消えていたと長左衛門が話しました。

四八、**榎田玄覚**、あやしいことにあう
かしだようあん
榎田養庵のおじいさんを

げんかく
玄覚といいます。

ある日、この玄覚が日の沈むころに近所へ話をしにいかうと出かけました。途中には青池弥右衛門の屋敷があり、その横に堀があります。玄覚がそのあたりを通りかかると、人もいないのに堀の中に投げ込まれました。その堀はいつもドロが深く玄覚は全身ドロまみれのいやな気持ちになりながら、たいへん不気味なことだと思いました。



すぐに家に帰り、さきほどあったことを話し、明りをつけてみると、来ていた着物にはドロが少しも付いていません。手にも足にもドロは付いていません。痛みもなかったといえます。何者がしたことか分からなかったとのことです。

四九、**桶屋平右衛門**、桂谷道であやしいことにあう

以前に桂谷かつらだにの松の木が、殿様から売り渡されることになり、桶屋たちがその木を買い求め、桂谷まで出かけて木をわって小羽こっぱにしていました。大聖寺からでは遠いので、桶屋たちは毎日通うことはできなく、その場所に簡単な小屋つくを造って寝泊りしながら毎日、木を小さくけずりとったのです。

そのなかの一人、桶屋平右衛門という人は大聖寺町に用事があって帰っていましたが用をすませたので、また桂谷へ行きました。季節が夏だったので人々は「昼休み」といい、田畑に出ずに休んでいました。それで行き来する人も無くてさみしい道を、平右衛門は歩いて行きました。

山中村に行く道に「ネコ岩ねいろ」という所があります。その下へ行くと、どこからか尺八の音色がかすかに聞こえてきました。平右衛門は、

（こも僧《こむ僧ともいう》がこのあたりで休みながら吹いているのだろう。）

と思いながら行くと、尺八の音がだんだん近く聞こえてきます。

すぐ近くに聞こえたとき、前の方の道に二人のこも僧が腰かけ

て、尺八を吹い

ているのが見え

ました。

ほかに、平右

衛門の前を歩い

ていく人がいま

した。平右衛門

が後ろから見て



いると、その人は二人のこも僧をよけて脇道わきみちを通っていきました。

平右衛門は何気なく、こも僧のいる道を、

「ごめんなさい、通りますよ。」

と言いながら通ったと思ったとたん、五、六間ろっけん《約一〇m》ほど

投げられていました。すぐにあのこも僧を見ましたが、二人は動

いてはいませんでした。

平右衛門は、とてもあやしいことだと思って、足早にそこから逃げ去りました。小屋まで行くと、人々にくわしく話をしてあやしいことだと語り合いました。



ネコ岩

山中温泉東桂木町の小学校跡地（現在の野球場）から約500mはなれた対岸にある大岩。

※『小羽』：小羽は木を薄く斧などで小さくけずった板で、屋根をふくのに用いたりした。また、小羽について『大聖寺藩の諸家文書（3）』の「山田家文書」二六〇ページには御関札おせきふだの小葉板を買ったとある。寸法は、三尺（九〇cm）に一尺（三三cm）で厚さが一寸（三cm）の板を買っている。

五〇、寺田木工、黒入道をみる

※寺田木工のお父さんも木工といひます。そのお父さんの方の木工があるとき殿様の御屋敷に行つて、藩の仕事を終えて夜中ごろに家にもどつたときのことです。

外馬場のあたりで、前の方から黒い姿のお坊さんが来ます。その姿がどんどん変わつて氣味

が悪いので、木工は（これが、

黒入道という者だな。）と思ひながら行きました。

しかし、近寄るにしたがつて、その背丈がとても高くなつていくので、

「化け物だ。」

と木工は刀に手をかけ、切りつけようとしてました。するとそのお坊さんの体が三つに折れて分かれしました。馬場の角にはムクデの垣根があります



ムクゲ（ムクデ）の垣

が、それらは、その垣根の間に逃げ込んでいきました。

これはきつとカワウソが化けて、何匹かが上下になつて、竹をつぐようにしていたのだらうと話したといひます。



※『寺田木工』：『温樹秘録』によれば、寺田木工や東方屯は殿様の利考公の近くに仕える御近習頭であつた。またこの本に出てくる奥村司は御近習であつた。

五一、町屋の者、山中道で不思議なことにあう

大聖寺の、ある町人が山中村へ行き、日暮れごろに歸つたときのことです。

大聖寺川の「あまだり淵」といふ所の近くを通りかかると、後ろから三人の子どもが歩いてきます。三人は町人を見て、「これは良いところへ人が来た。」

と言つて喜んでいました。

さらに、河南村といふ所で、



あまだりの淵



「ワハハッ。」

と後ろから笑う声がしましたので、先ほどの子どもたちが何を笑っているのかと、町人が振り返って見ると、あの子どもたちは一人もいません。なんとも不思議なことだと思い、とてもこわくなりました。

でも、しかたなくその村を通り過ぎると、今度は、あの子どもたち三人が前を歩いて行くのが見えませんでした。

（これはあやしいことだ。されるがままでいたら何をされるかわからない。こちらから先にやっ

つけよう。）

と手に持っていた棒を振り上げて（三人の子どもを打ち殺そう。）

と思いました。

そこで、どんどん近づいていくと三人の話が聞こえてきます。その声をよく聞くと子どもの声ではなく、女の老人たちの声でした。

「それにしても、ありがたい仏教のお話でしたね。」

と話しているので、注意深くよく見ると三人は化け物ではなく、そのあたりの村の老人たちで、寺のお参りから帰るところのようでした。

前に見た子どもたちも、この人たちだったのでしょうか。または、子供たちは化け物でこのようにだましたのでしょうか。



河南町

もう少しであの老女たちを棒でたたいてしまうところでしたが、少し落ち着いて気がつき、人を傷つけなくてすんだと話していました。

五二、佐藤弥吉、大入道をみる

外馬場で黒入道に会い、そとば くろにゅうどう 気を失った者がいるといいます。

そんなあるとき、佐藤弥吉という人が夜中に二ツ屋村で黒入道に出会いました。刀を抜いて追いかけたのですが、その者は山の方へ逃げていきます。それでも

追いかけていきましたが、追いつくことができませんでした。その逃げていくところを見ていましたが、山へ逃げ登ってどこへ行ったかわからないということでした。



五三、古川孫右衛門、いろいろ不気味なことにあう

古川孫右衛門という人は、勇敢で負けず嫌いの性格の人でした。ふるかわまごう えもん ゆうかん きまら ある夜、一〇時ころから用事があつて月津村に行く途中、八日市

というところの石橋近くを通りかかると、道の真ん中に死んだ人を入れるカメがあります。

(これは誰かが私をおどろかすために、いたずらして置いてあるのだろう。)

とそのカメを道のわきに片づけて通り過ぎました。

そして、動橋を過ぎ

七曲※ななまがりというところを通

りかかると松の木から何かぶら下がっています。

よく見てみると、冬瓜とうがん《カ

モリ》の形をして目鼻が付いたものでした。それにもこわがらずに通り過ぎて、月津村へ着くと用事をすませて帰ることにしました。

その帰り道は何事もなく敷地村の近くまできて、お地藏じざうさんのそばでタバコを吸すって休んでいました。そのうちに、敷地村の方



七曲り

からとても大きな男がやってきて、

「タバコの火を貸してくれ。」

と言いながらキセルを取り出しました。そのキセルの皿を見ればとても大きく、まるでお皿のようでした。孫右衛門は考えます。

(これは、何者かが化か^ばそうとしているのだろう。)

そこへ大男が聞いてきます。

「あなたはどこへ行くのですか。」

「私は月津村へ行つて帰るところです。」

孫右衛門が答えると、さらに男は聞いてきます。

「月津村へ行く途中で、何か変わったことはありませんでしたか。」

「いいえ、何の変わったこ

ともありませんでした

よ。」

と孫右衛門が答えると

「それはウソだ。このよう

なものが出たのではな

いか。」



と大男が言うが早いか、前に見た冬瓜に目鼻がついた化け物^{もの}に姿を変えました。

しかし、孫右衛門は勇気のある男だったのでそれにもおどろかず帰って行ったといひます。



※『七曲』：北国街道の助橋村と高塚村の間の道が左右に曲がりくねっていた所をいう。二つの村の間は沼地^{ぬまち}のような田が広がり、七曲をジグザグに通らないと敵国^{ていこく}の軍が進めない。そのとき、敵の数や武器^{ぶき}を打越村^{うちこへ}から見られるよう工夫したという。今は街道松もなくなり、道も田を区画整理^{くわくせいり}し、交通に



興宗寺

不便ということではほとんど残っていない。右の写真は七曲小公園の碑から。
五四、月津村興宗寺の新しいお坊さん、不思議なことにあう
つきづむら 月津村というところに、興宗寺こうしゅうじというお寺がありました。そのお寺に新発意しんぱつちと呼ばれる出家したばかりのお坊さんで、右弁うべんという人がいました。

あるとき、右弁は大聖寺から夕方頃に月津村へ帰ろうと、家来ちようちんを一人連れ提灯をともして出かけました。打越村を過ぎて一里塚いちりづか

の近くまで来ると、今まで真っ暗な夜だったのに、急に月夜のように松の影などが映るほど明るい夜になりました。

最初は何のうたがいもなく、（もう月の出る時間になったのか。）と思っていたのですが、よく考えてみると今日は新月しんげつなので、月は出ているはずがありません。右弁がおどろいて

いると、持っていた提灯の火が何もないのに消えてしまいました。そして、（月は？）と、見上げましたが月もなく何も見えない真暗くらやみ闇になってしまい一步も動けません。しかし、いつも通っていて迷うことの無いほどよく知った道だったので、一歩ずつ探さぐるようにして何とかお寺へもどれたということでした。

五五、村井矢柄、「おこり」の神をぶんなぐる

むらいさじま 村井佐治馬のお父さんの矢柄やへいという人は、流行病はやりやまいにかかり、やっとなりました。今度は、一日おきぐらいに身体が震ふるえるほど熱が出る「おこり」という病気になって苦しみました。

ある日、これまでのようにまた、熱が出て苦しむので、家の者がそばに付きそって看病かんびようしていたことです。看病している人が何だかとても眠くなってきた、知らないうちに眠ねってしまいました。そのとき、あやしい何者かが矢柄の寝ねている枕元にきま

す。矢柄は、少し目覚めてうつらうつらと横たわっていましたが、生まれつき気の早い男で、

「よし、こい。」

と迎えうつため、むっくりと起きあがり、相手に飛びついて組みついてたかいました。相手はかなわないと思ったのでしょう、組み合っているうちに少しずつ後ろへ退き、ついには台所まで下がっていきました。

台所でも矢柄は相手と組みつき合っていました。最後には相手を押さえつけてしまい、そばにあった下駄げたを取り、下駄で相手をたたきました。

台所での音を聞いて、家の者はおどろいて出てきて台所のようにをみました。ところが、台所には何もあやしい者はいません。矢柄だけが台所にたおれていました。家の者みんなが集まってあれこれ介抱かいほうして気を取りもどさせようとなりました。しばらくして矢柄は我にかえり、あったことを話したといひます。

そのころ、矢柄のお兄さんに典膳てんぜんという人がいました。その典膳の家で働いていた女も「おこり」に苦しんでいました。そして、女は高熱がでるといふことを話しました。ところが、その女が熱にうかされて言うことがすべて本当におこるので、人は皆、不思議なことだと思っていました。

ある日、熱が出て苦しみながら、

「げんちく玄竹どのが今こちらへ来られるでしょう。今、ここからちよつとはなれた所で用をたしておられますから。」

と言ひます。玄竹というのは原玄竹という医者のことのようです。たいへん不思議に思つて家の者が外へ出て見ると、女が寝ながら言ったとおり、はるか向こうで原玄竹が用をたしていました。そして、玄竹はしばらくして典膳の家へ来たといひます。

また、その女が熱にうかされて、

「今、矢柄どのは『おこり』にかかっています、この『おこり』は山にかくれる悪い神で、大変に悪い神です。先日、矢柄どの活躍かつやくがなければ簡単かんたんに退治できなかったでしょうに、矢柄どのは良いことをなされました。」

と言つたといひます。

世の中で「おこり」の神※と言われているものが本當にあるのでしょうか。

※『おこりの神』…おこりだけではなく、悪い病気を

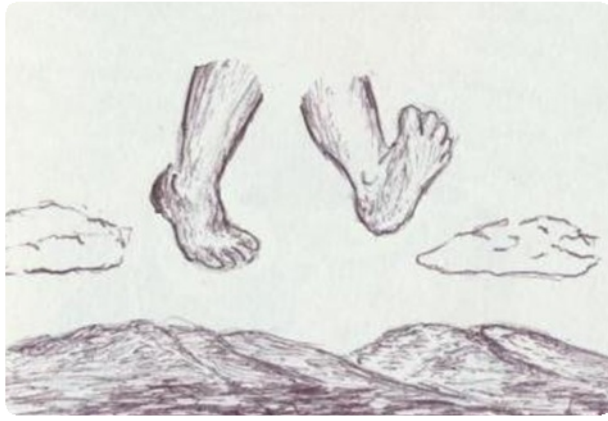


流行らせ、人々を苦しめる力を持つと意識されていた疫病神としての一つとして「おこり神」が存在すると思われていたと考えられる。医療の発達していない時代には疫病が流行ると手の施しようがなく、あとは神だのみで疫病神におとなしく退散してもらうのを祈るしかなかったようである。

五六、竹内半左衛門、鳥打坂であやしいものを見る

竹内半左衛門の義理のお父さんも半左衛門といえます。そのお

父さんがあるときに、鳥打坂へ出かけたときのことです。



山にさしかかったとき前の方から人の上半身はないのに、足だけが空中を浮いて歩いてきます。これは不思議なことだと見ているうちに、足は一つの谷間の方へ行っていました。少しすると後ろから四、五人がカネや太鼓を鳴らして人を探すようにしてやってきます。半左衛門を見ると、

「もしかして、こんな人に会いませんでしたか。」

とたずねてきました。半左衛門は

「ほかに人には会っていません。でも先ほど、こんなことがあり、あそこの谷へ行きましたよ。もしかして不幸な目にあっていないかもしれません。いっしょに行ってみましょう。」

と答えて、その人達といっしょに谷へ行ってみると、その探していた人はズタズタに引き裂かれて死んでいました。それで、とても不気味なことだと言い伝えたそうです。

五七、ある者が山でコワイ目にあう

ある人が山を通ったときに前からとてつもなく大きな人がやってきました。その人に向かって大男が言います。

「お前、おれの家来になれ。」

「あなたがどの誰かもわからないのに、家来にはなれません。」と答えると、大男は

「何が何でも家来になるのだ。言うことをきかないのなら覚悟しろ。」

そう言う、その人の足元に何か四角いものをつけてきました。

「これになんの意味があるのかわかりませんが、それでもとにかく家来になれません。」



「忘れていた。」

と谷へ行き、その人の足につけた四角いものを取り去って、どこかへ行ってしまったといいます。

その人は夢から覚めたようにハッとすると、逃げるようにして家に帰っていったといいます。

と強情に言うので、その大男はものすごくおこり、

「憎たらしいやつだ。」

とそのままその人を谷へ投げ飛ばしてしまいました。

「それにしても憎たらしい

やつで、殺したいほどだ

が、今度だけは許してや

ろう。」

と立ち去ろうとしたのです

が、

五八、深町内匠、狩りに出かけてあやしいことにあう

ふかまちまこいち

たくみ

深町孫市の先祖で内匠という人がおりました。内匠はとても勇気がある人でおどろくようなできごとが好きでした。仕事の暇があるたびに山奥や深い谷に散歩にでかけ、昼や夜の関係なくおもしろいことを探して歩いていました。そのときは、必ず足の速い犬を連れ、キツネやタヌキを捕まえて楽しんでいました。

くろせ

ある夜、一人の家来を連れて黒瀬村というところの古い神社のそばへ行くと、いつものよ

かり

うに犬を使って狩をして遊

んでいました。夜中の二時

ごろになり、主人も家来も

疲れてきたので神社のお堂

の中に入って休んでいまし

た。だんだんと眠くなっ

きたので二人ともウトウト

としていました。しばらく

して、急に神社の外から自

分たちの名前を呼ぶ声がし



黒瀬町の神社

ます。内匠と家来はビックリして目が覚め、外を見ると人がいました。体に鎧よろいをつけ、手に藩の命令を持ち、悪人を捕らえる役人や兵をたくさん引き連れていきます。ヤリのさやは外されており、その役人は、大きな声で言いました。

「お前は、武士として正しく生きることができていない。無益に、

自分の勇気をためすために、みだりに殺生せつしょうを好むのがいけないのだ。

特に今日は、殿様の家の御先祖のためにつつしまねばならぬ日であるぞ。

藩の法を破る罪は許しがたいものである。このこ

とはすでに殿様の耳にも入っており、殿様が切腹せつぷくを

ご命じになった。覚悟かくごせよ。私はその立会人たちあいじんとしてここに来たのだ。」



それを聞くと内匠も家来も大あわてです。内匠は覚悟を決め、切腹しようと脇差わきざしの柄つかに手をかけました。しかし、家来が言います。

「少し考えてみてください。いくら殺生をしないという決まりを破ったとしても、切腹まではご命令されないのでしょうか。その上、こんな遊びに出かけている途中にご命令があるなど、いろいろと言っていることもおかしいですよ。」

それで、内匠もこれはキツネやタヌキのしわざではないだろうかと思ひ付きました。しばらくようすをうかがっていると、その使者は内匠が切腹せずにためらっているようすにとってもおこりだしました。

「すぐに切腹しないとは、殿様の命令に背くそむことであるぞ。しかし、決心がつかないのならば、こちらで手伝てでんってやろう。」

と、大きいヤリの穂先ほさきを、何本もいっしょにそろえてこちらへつきつけてきました。

二人は本当に殿様の命令だったらどうしようかと

思い、はむかうこともできずに冷や汗を流していました。しかし
家来はとても冷静な者だったので、気がついて言うには、

「このお堂の扉の隙間はわずかに二、三寸《約六〜九cm》しかあ
りません。あの大きなヤリは入ってこれませんよ。これは人の
しわざではないと思います。よく気をつけて見てみてくださ
い。」

とのことでした。そこで、月の光でよく見てみるとヤリの柄ではな
く、アシや麻の木のようなもので、それにヤリの先はツバキの葉
やユズリ葉をさしたものでした。

「これは、憎らしいやつ
だ、逃がさん。」

と神社から出ていくと、皆、
クモの子を散らすように逃
げて行きました。

これは野ギツネが、動物
をよく殺す内匠の行ないを
こらしめようとして、たく
らんだものだといいます。



長流亭 『錦城名所』より
長流亭の左に織部河道がみえる。萩生への道、その向こうには藩主の御屋敷の堀が描かれている。

春の夜の、手持ちぶさたで退屈たいくつなとき、殿様が夜通し警護けいごのために御屋敷おやしきにいる家来に、「古くから百物語ひゃくものがたりというものがある。百の妖怪ようかいの話を、話し終わったとき妖怪があらわれると聞いておる。さあ、今夜は話してみよ。」とおっしゃった。

夜の警護の武士がいろいろとお話を語り、百になろうとするころ、もう短い夜もふけ二時ごろになっていました。そのとき何もしないのにお庭の方でとても大きな物音がしました。

「さあ、妖怪が出て来たのだらうっ。」とたくましい男たちが勇ましく、「よし、私が妖怪めを組み押さえてやるっ。」などと叫び合い、ロウソクを手にして部屋から出てみました。見れば、そこには、屋根の先に真冬に降り積もった雪の残りが、春の風に溶けて落ちたものがあつたのでした。

早くもニワトリが鳴き、やがて東の空を赤く染めてそ日が昇ってきています。夜が短く思えるほどの「百物語」は、どんなにかおもしろかったことでしょうか。

何といっても妖怪というものは、悪いことの積み重なったもの。雪もまた、暗い日陰ひかげで積み重なるものですから、あの屋根雪が春風に溶けて落ちたように、妖怪も、殿様の良いお心によって消え

て無くなるでしょう。実際に、「あやしいものは、立派で良い心には勝てない。」とも聞きます。

あとで、「雨の夜のたいくつな時のために持っていたいから、この百の話を記録せよ。」と殿様がおっしゃいました。

このように歳としとった私が、学問を浅くしか学んでいないのに、「筆の海」といわれるすずりを使い、下手な書き方でこれらの話を取りとめもなく書き集めました。

殿様も喜んで下さり、この本の初めに「もちろん子どものための物語で、本当でないことを本当にあつたことのように書いた。」と、お言葉《聖城怪談録序せいじょうかいだんろくじよ》を書かれました。

昔の中国の孔子こうしが、「立派な人はあやしい力や悪い鬼などおそれて語るものではない。」と注意されたが、この本は、あやしいものをおそれたものでなく、子どもの遊びのようなもので、孔子の注意があてはまるものではありません。

化けばものの ありやなしやは 白雪の

きえては水に 今朝の春かぜ

臣しん 慙かん々 翁おう 謹きん 跋ばつ

《家臣のおろかすぎるじいのあとがき》

聖城怪談録 解説

聖城怪談録を世の中に発行するにあたっての原本は、主に大聖寺藩主であった前田子爵家が持っていた本である。けれどもこの本もかなり誤字脱字が多く、解説するのが難しいものであった。しかし、日置先生はこれらの箇所到一个ずつ手を加えてようやく文の意味が通じるようにされた。

内容は、寛政一年《一七九九年》正月の、月もなく暗い夜に、当時の八代藩主の前田利考公が、宿直していた護衛の兵士を集めて、それぞれに見聞きした妖怪の百物語を語らせた。そして、その全部の話の内容をいっしょに聞いていた悠々翁《正しくは悠々翁》という家臣に命じて書き記し編集したものである。それに利考公の序《前書き》および編集者の跋《後書き》が添えてある。

「百物語」というのは、古くから全国で行われている度胸だめしのことで、まず、青い紙をはった行灯に百本の火をともしておく。怪談の一話が終わるごとに一本ずつ火を消していくとだんだんに部屋の中が暗くなり、青い紙の色がうすく辺りにうつって見えるので何となくゾッとするような迫力が増してくるのだ。そしていよいよ、最後の一本が消されて真っ暗闇になると必ず妖怪が

あらわれると言い伝えられている。

この大聖寺屋敷での百物語のときも最後の火が消えるとすぐに庭でもものすごい音がして、皆がどよめき、ろうそくの灯りを持って庭に出て見に行ったが、それは屋根に積もった雪が春の雨に溶けて落ちてきたものだったと後書きに載せられている。

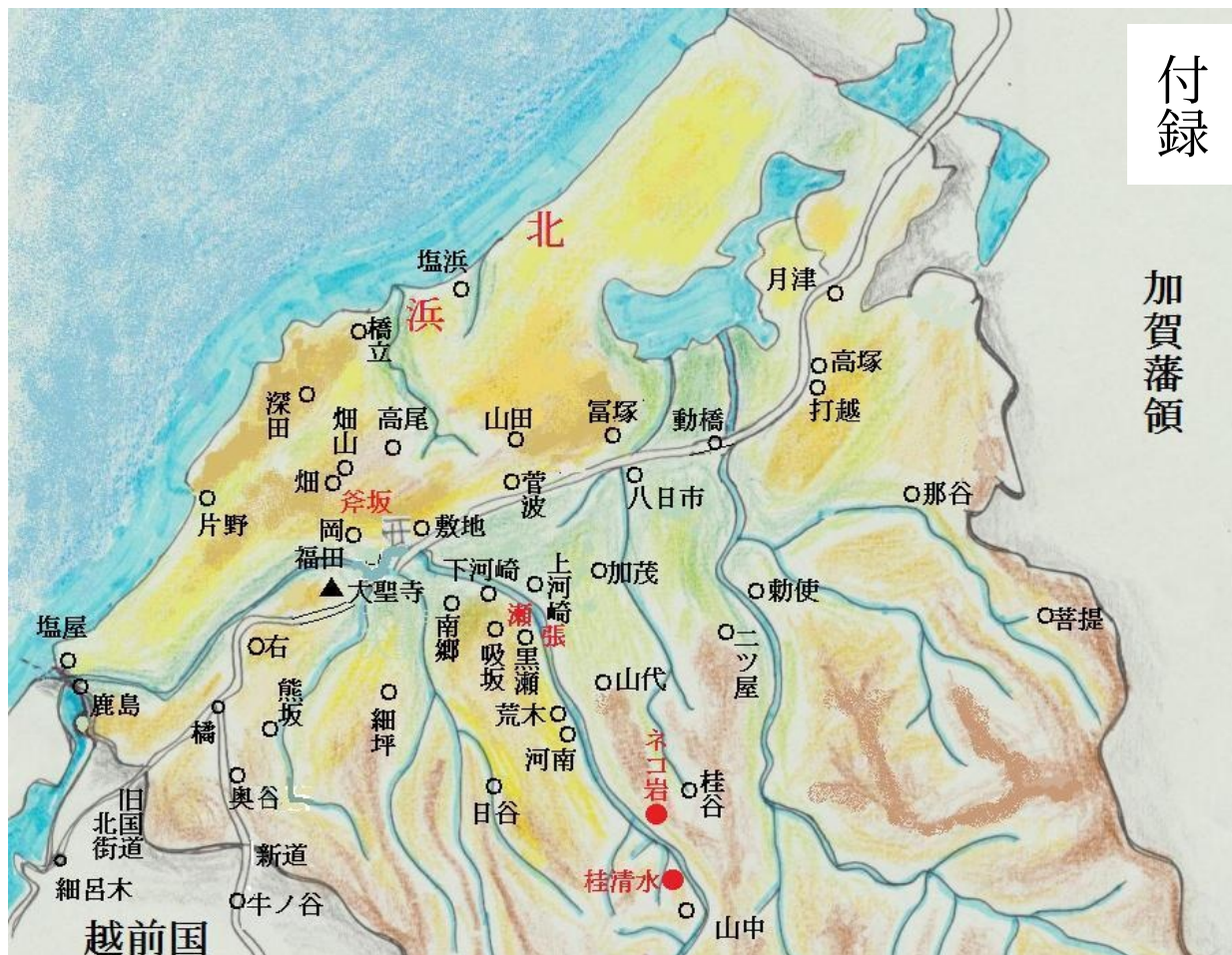
要するに、大聖寺怪談録《正しくは聖城怪談録》は殿様の楽しみの一つとして集められた怪談集であるので、有名なものだが、その内容が貧弱であり、中にはまとまりのない作り話も少なくないようだ。

昭和十二年二月下旬 解説者 太田 敬太郎

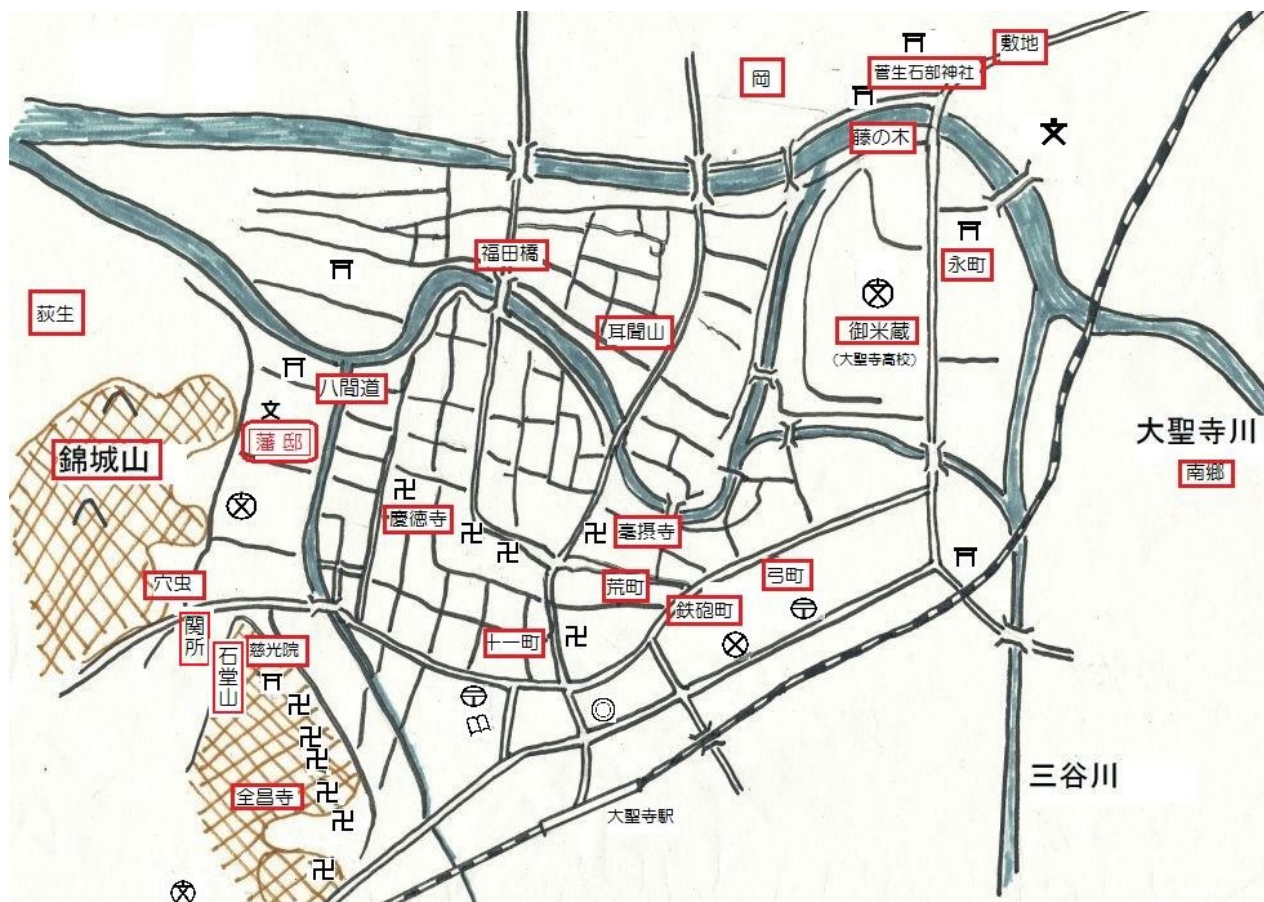
《石川県図書館協会発行・大聖寺藩史談 解説より》

付録

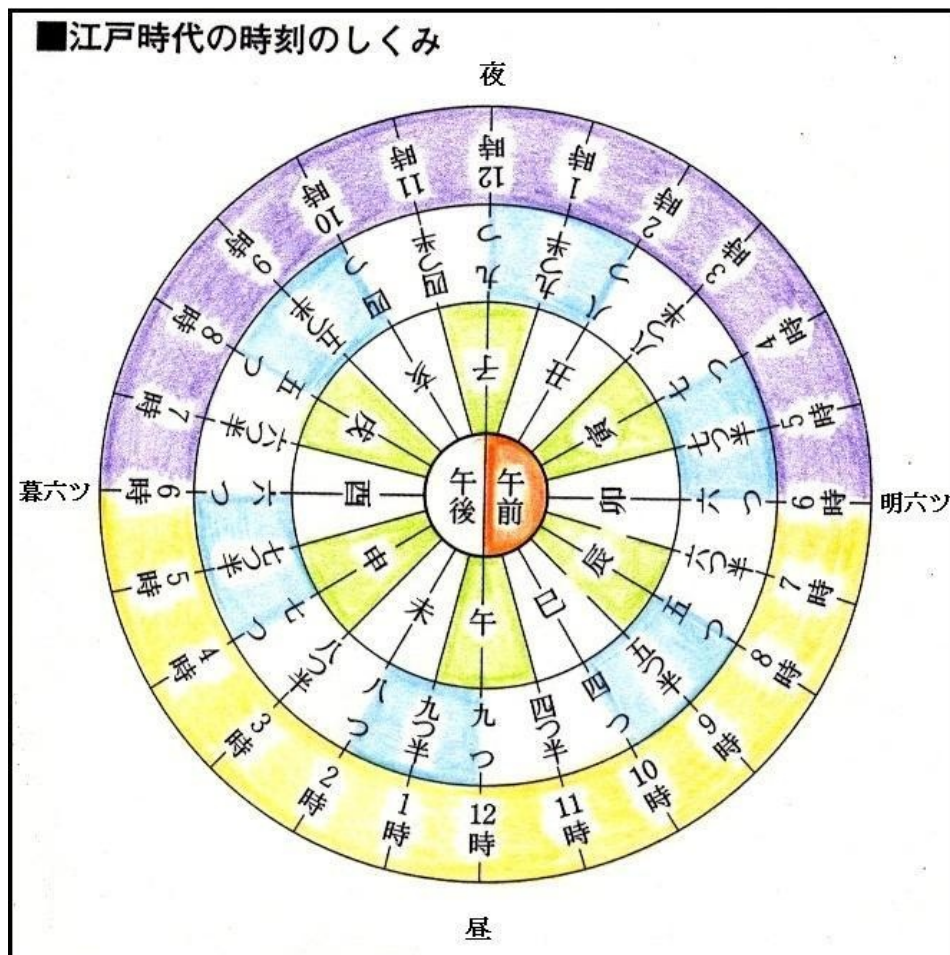
加賀藩領



聖城怪談録に出てくる村の配置図（片谷村はのせてありません。）



聖城怪談録に関する大聖寺町内図



現在は1時間＝60分で正確に一定の時刻ですが、江戸時代の時刻は現在よりずっと複雑でした。江戸時代では日の出と日の入りを基本にして昼と夜をそれぞれ6等分して12刻(とき)にしました。

日の出と日の入りが基本なので、当然同じ1刻でも、夏は昼の1刻が長くて夜の1刻は短く、冬は昼の1刻が短く夜の1刻は長く、と時刻を変えていました。これを「不定時法」といいます。

また、日の出前に星が見えなくなる時刻を「明け六ツ」、日が暮れて星が見える時刻を「暮れ六ツ」としました。(この本では、「明け六ツ」を午前6時、「暮れ六ツ」を午後6時として訳しました。)

◆長さ・距離

1 里	(3 6 町)	...	約 4 km
1 町 (丁)	(6 0 間)	...	約 1 0 9 m
1 丈		...	約 3. 0 3 m
1 間	(6 尺)	...	約 1. 8 m
	1 尺	...	約 3 0 cm
	1 寸	...	約 3 cm

◆重さ

1 貫	(1000 匁)	...	約 3. 7 5 kg
	1 匁	...	約 3. 7 5 g

参考資料一覧

文献

書名	著者(編者・校訂者)	発行	出版年代
『大聖寺藩史談』『松下筆談』復刻	草鹿 瑠	石川県図書館協会	1937
『大聖寺藩史』復刻	大聖寺藩史編纂会	大聖寺藩史編纂会	1938
『山中町史』郷土関係図書	若林喜三郎	山中町史刊行会	1959
『聖城叢談』復刻	高沢小一郎	江沼地方史研究会	1957
『秘要雋集』復刻	日置 謙(校訂)	石川県図書館協会	1971
『大聖寺藩史談』『温樹秘録』復刻	不詳	石川県図書館協会	1971
『加賀市史 通史上巻』	加賀市史編纂委員会	加賀市役所	1978
『加賀市史料(二～四) 大聖寺藩史由緒帳』	牧野隆信(編)	加賀市立図書館	1982
『庄村々史』	庄村々史編纂委員会	能登印刷	1984
『加賀市史料(五)』『御算用場留書』	牧野隆信(編)	加賀市立図書館	1985
『加賀江沼人物事典』	江沼地方史研究会	橋本確文堂	1989
『図説・日本の妖怪』	岩井 宏寶	河出書房新社	1990
『大聖寺城下町と町人社会』	田中 善男	能登印刷	1990
『憑き物百怪』	水木 しげる	学習研究社	1995
『ニッポン神さま図鑑』	宗教民族研究所	はまの出版	1996
『図録 日本の合戦武具事典』	笠間 良彦	柏書房	1999
『日本民俗大事典』	福田アジオ他	吉川弘文館	1999
『分校地区志 ふるさとの歩み』	分校地区志編纂委員会	分校地区志編纂委員会	2002
『加賀江沼の字名』	字名調査委員会	江沼地方史研究会	2004
『大江戸まるわかり事典』	大石 学	時事通信社	2005
『イラストでみる日本史博物館』	香取 良夫	柏書房	2008
『図解雑学 日本の妖怪』	小松 和彦	ナツメ社	2009
『大聖寺藩の諸家文書(3)』	山口隆治	北野印刷	2010
『日本の神々 多彩な民族神たち』	戸部 民夫	新紀元社	1998

監修

文学博士(史学) 山口 隆治

※本書掲載写真の無断転載、複製を禁じます。